

特100

746



始



特100
746

貯金集



貯金局

特100
746



貯金

實話

貯金獎勵資料 第七編

同局

貯
金
局

大正
11. 3. 14
寄贈

緒言

一 曩に當局に於て懸賞募集をなしたる貯金實話の當選及選外秀逸の分を『貯金獎勵資料（郵便貯金に關する講演資料）を改題）第七編』として編纂するにこゝせり。

一 参考の爲募集條件の主なる條項を左に摘録す

イ 一般の模範となり且實行し易き貯金の實話にして其獎勵資料に適するもの、但し公表差支なきものたることを要す。

ロ 貯金實行者は個人たると團體たるとを問はず、又時代及場所に制限なし。

ハ 記述の体裁は説話體、小説體等何れに依るも可なるも、貯金の動機、實行方法成績、運用方法等可成詳細記述し、數字を以て示し得べきものは之を示す可と

す。

ニ 投稿者は必ずしも実行者たることを要せず。

ホ 懸賞金 一等百圓一人、二等五十圓二人、三等二十圓二人

一 本年二月二十二日募集の發表をなし、同年三月三十一日締切りたるを以て、約四十日の短期間なりしも、應募總數は約二千通の多數に達したり。

参考の爲地方別を左に掲ぐ。

東京	一九五	大阪	一六〇	兵庫	九二	北海道	八〇
長野	七四	廣島	七三	愛知	六六	島根	五七
朝鮮	五六	福岡	五五	京都	五四	神奈川	五一
三重	四〇	山口	三八	新潟	三七	福島	三五
岐阜	三五	石川	三五	静岡	三五	鳥取	三四

和歌山	三四	徳島	三三	滋賀	三一	岡山	三〇
福井	二九	千葉	二九	長崎	二九	宮城	二七
香川	二六	鹿児島	二五	栃木	二三	山梨	二三
愛知	二二	熊本	二一	秋田	二〇	群馬	一九
茨城	一九	巖手	一七	宮崎	一七	佐賀	一七
山形	一七	富山	一六	大分	一六	奈良	一六
高知	一三	滿洲	一五	埼玉	一一	青森	一〇
樺太	九	臺灣	六	山東省	三	沖繩	二
西伯利	一	不明	一	計	一、九二九		

一 應募原稿は貯金の動機、方法、利用、成績等に亘り嚴密に審査をなし、優良を認めらる、ものに就き事實の眞偽を調査し當選の決定をなしたるが

中には極めて優良のものも或は事實にあらず又は非常の修飾を加へたるもの等ありて、實話として一等に該當するものなく、二等一名増加せり。

一 總じて如何なる境遇の人も或る一の動機に促され根氣強く繼續せば、一廉の貯金は出来る云ふ感を深からしむるは、此の實話に就き最も注目すべき點なるべし

大正十年十一月

貯金局

目次

- 一、亡夫の遺訓 (二等當選) 一
- 二、俸給生活者の貯金 (二等當選) 一三
- 三、七文から五萬圓 (三等當選) 三〇
- 四、勤儉の生涯 (三等當選) 六〇
- 五、青年團の貯金 (三等當選) 八四
- 六、貯金して女子高師卒業 (三等當選) 九三
- 七、工女の貯金 (三等當選) 一〇五
- 八、小學教師の貯金 (三等當選) 一二三
- 九、青年自覺奉公貯金 (秀逸) 一二四

目次

二

十、海軍軍人の貯金（秀逸）……………一二九

十一、民力涵養貯金実行組合（秀逸）……………一三八

附録

○喜びと悲み……………一四七

○民力涵養貯金実行組合近況……………一四八

貯金實話

一、亡夫の遺訓（二等當選）

東京市麻布區市兵衛町二ノ二五

高樋さい子

私の今日自活し得るは

亡夫の貯金の賜

私は五年前に一家の柱石たる夫に亡く

なられまして、只今は十三歳を頭に九歳

七歳の三人の子供を養育する爲に、學生の下宿屋を營業致して居る者で御座

亡夫の遺訓



高樋さい子さん

亡夫の遺訓

二

います。物價騰貴の今日、三人の子供を一人も親戚にも頼まず、全く自分の手一つで養育致す事の出来たのは、亡夫の他人にたよらぬ日常の教訓、勤儉で貯金せられた賜による事、日夜感謝して居る次第で御座います。

友人の不幸を見て痛感した貯金の必要

私共は明治四十年の十月結婚致しまして、十二月に主人は長野縣で林務課に林業技手として奉職する事になりました。

新婚當時は何の考もなく、主人の俸給全部は勿論、出張旅費も皆遣つて居りました。尤も主人は生命保険五百圓、役所の貯金三圓は致して居りましたが、其外には一文の貯金もせず安閑と暮して居りました。

處が四十二年の十二月に長男が生まれまして、色々費用がかゝりますので、漸く貯金の必要を感じて参りました。それ、今一つの動機は忘れもせぬ翌年

の二月十七日、出張先から歸られた夫は、いつになくまじめで『僕は今度の出張でつくづく貯金の必要を感じた。それは外でもないが、友人の某君が突然病死せられた。若い未亡人は二人の子供の外に妊娠七ヶ月で、元より薄給の事、一文の貯金もなく、それに某君が三男まで財産にては何一つない實に氣の毒な有様だ。葬式の後親戚會が開かれて、子供は某君の兄、奥さんの姉で見ることになり、未亡人は大きなお腹をかへて、實家の厄介になるこの事で、僕も思はずもらひ泣きをした。實に人の運命程わからぬものはない。吾々も同じ月給取りの身で、いつ如何なる不幸がふりか、つてくるかわからないのに、今迄はあまり呑氣に暮しすぎたのだ。人間はさうしても貯金をしなくてはならない。僕は今日から決心して貯金する』と申して、早速實行致しました。

亡夫の遺訓

三

天引貯金、出張貯金、廢物利用貯金

先づ第一に、天引貯金三圓、外に子供の分一圓宛毎月致すことに定めました。同時に生命保険にも千圓はいる事に決心致しました。

當時如何に物價は安くとも、三十五圓の俸給でこれ丈の貯金は随分骨折りでしたが、主人は長男の事にて田舎には少しの財産もあり、それに一ヶ月の半以上は出張致しますので、旅費の方で餘程助かりました。

今一つ主人は珍しい貯金を始めました。それは出張貯金云ふのです。四月の十一日出張から歸られた夫は『僕は今度出張先で煙草をやめたが、大變頭の工合がよくなつた。それを記念として貯金を始めた。今迄は毎日敷島一つづ、は必ず買った。其の代り、今度は出張先で郵便局のある度毎に、二十錢づ、貯金する事にきめた。其の日によると一日に三四ヶ所郵便局のある町

村へ出張する事があつて、知らず識らずの間に毎日四十錢なり、六十錢なりの貯金が出来た。今度の出張で十三ヶ所の局で貯金をした。此の通り日附印が皆違つてゐて面白い』と申されて、一冊の貯金帳を出されましたので、誠によいお考へに私は非常に嬉しく思ひました。

それで私も何か一つ變つた貯金を致したいと思ひまして、五月一日からお勝手へ廢物利用貯金箱云ふ箱をかけました。此の箱は月末に私が鍵であける外に、誰もあけることの出来ない箱でございます。

此の中へ入れるお金は、髮結錢として五日目毎に十錢宛入れます。今迄日本髪を結つてゐましたので、五日目には髮結さんに十錢宛拂つてゐましたが五月から日本髪を止めて自分で束髪に結ふことに致しました。其の外新聞、雜誌、紙屑類、子供の古着の用ひられない物などを賣りましたお金も其の箱

へ入れます。それから買物の時にまけさせたお金（田舎では必ず云ひ値より少しはまけます。八百屋なり、魚屋なり、例へば三十錢のものを廿八錢に致しました時は、其の二錢）を此の箱へ入れる事に致しました。月末に此の箱をあけますのが非常に楽しみでした。少なくて一圓四五十錢、多い時には三圓二三十錢あります。之を月末に皆出して、一つの貯金帳につけるやうに致しました。

一家五人に五冊の貯金通帳

かう致しまして、數年間續けて参りました。其の中に俸給も増し、子供も二人殖えて三人になりましたが、子供にはいづれも毎月一圓宛貯金を致させました。

かうして大正四年八月には一家五人が各自貯金通帳を持つやうになりました。子供の貯金は半分は勸業債券、半分は貯金にしておきました。一人が二十圓になりますと、十圓だけ下けて債券を買ひます。只今は十三枚持つてゐます。

天引貯金の方は病氣の時とか、來客の時とか生命保険の掛金の時に下けて遣ひます。主人の出張貯金と私の廢物利用貯金は、決して下けぬ事に致しましたのです。

此の圓滿な家庭には精神上にも、物質上にも何等の不足がなく、幸福に暮してゐましたが、突然思はぬ不幸が身にこゝつて参りました。

逆境に入り始めて貯金の有難さを知る

思ひ出すも涙の種、大正六年の六月二十五日、カミ頼む夫は病の爲に最早五時間もむづかしいと醫師が宣告しました朝、（申しおくれましたが夫は熱心なキリスト信者で御座いました）私に向ひまして「僕は國家の爲めに十分盡

くすこぎが出来なくて残念だ。まだくこれからしようと思ふ仕事も澤山有るのだが、何事も神の命だから自分はすべての事を神にまかせる。お前には氣の毒だが、さうか三人の子供を頼む。お前ならばやれるでせう。何事も神にたよるがよい。さうかよろしく頼む』と申されて、三時間の後には睡るが如く天國へ赴いたのです。

其の時の心中をお察し下さい。當時三十一才の私が、九才、六才、三才の東西をも知らぬ幼子を抱へて、一時は氣も狂はんばかりに悲しみました。

然しいつまでも泣いてばかり居られる身ではありません。今は三人の子供の爲に涙をふり捨て、強く成り、世の荒浪を闘はなくてはならぬ。今自分が弱つては、誰が此の子供の世話する者がありませう。自分は父の無い此の三人の子供を立派に教育しなくてはならぬ重い責任の有る身だ。主人が最後迄

自分を信じて此の重い責任も『お前なればやれるでせう』と云はれた言葉に對しても、自分はしつかりしなくてはならぬと決心致しました。親戚の方々や、心易い皆様が色々心配して下さいまして、兎に角三人の子供を連れては骨が折れるから、子供は親戚へ預けるやうにさか、他家へ呉るれやうにさか、又は再縁するやうにさか心配して下さいましたが、私の決心を申して皆様の勧めを皆断つてしまひました。子供は三人とも自分の手で養育する事に致しました。

然し何を申しても、今迄とは違ひ収入も少なく、物價は益々騰貴するばかりで、女の手一ツで三人の子供の養育は随分人に知れぬ苦勞が御座います。逆境にあつては身を落さして働くのが第一と考へました。それには田舎よりは東京の方がよろしいと思ひまして、東京の親戚にもよく相談致しまして、

いよく大正七年の十二月十八日に三人の子供を連れて上京致しました。上野へ着きました時『お家へ歸る』と子供に泣き出された時の悲しさ、迎も夫を亡ふた人ならではわからぬ淋しさでした。

亡夫の魂で親子四人が自活

今後の生活に付きまして色々考へましたが、あまり淋しい生活より、やはりいそがしく働く仕事の方がよろしいと思ひました。それで女學校時代の寄宿舍生活の樂しかつた事を思ひ出しまして、學生の下宿屋を始める事に致しました。何事をするにも先立つものはお金で御座いますが、主人は生前人は何事によらず決して他人をたよつてはならぬ。殊にお金はたこへ親戚の間でも貸し借りしてはならぬ。それで金の必要があるのだと常々申されましたので、さうしても自分の力で致さなくてはならぬと考へまして、今迄一度も下

けた事のない亡夫の出張貯金と自分の廢物利用貯金を合せて、四百三十五圓ばかり有りましたのを引出しました。これこそ亡夫の魂の入つたお金ですから、此の金を以て始めましたら必ず親子四人の生活は出来る事と思ひまして、早速此の下宿屋を譲り受けまして、愈々大正八年の二月一日から營業を始めました。

馴れない事にて始めの中は困りましたが、お客様が誠におこなしい親切な方ばかりで、只今は學生が十人居りますが、皆兄弟のやうにして暮してゐます。そして無經驗の私が何の失敗もなく營業の出來ますのは、何よりの仕合せだと喜んでゐます。

三人の子供も至つて健康で、當時尋常二年生だつた長男も此の四月には六年生となり、父の死んだのも分らなくて『父ちゃんいつ歸るの』と云つて私

を泣かせた次男も四月には尋常二年生に、父の顔さへ知らぬ末子も七才になりまして、三人も父の無い子も見へぬ程元氣に成人致してをります。

私も一層健全に人一倍働いて居ますが、頭痛一つ知らぬ程の健康で、一心に子供の教育に力を盡くして、現在の境遇に満足して暮してをります。物價騰貴の今目田舎者のふつ、かなる私が、何の失敗もなく自活する事の出来ますのは決して私の力ではありません。之皆神の御めぐみ亡夫の守護による事、日夜感ずると同時に、貯金の有難さを痛切に感ずる次第で御座います。

二、俸給生活者の貯金 (二等當選)

名古屋市西區南鷹匠町一ノ七内田方

棚橋信三郎

私の實行した貯金のお話する前に、總括的に私の身の上の變遷を述べておきたい。

私は次男として生れ、親より纏まつた財産も貰はず、獨立獨歩自給自足云ふ生涯であるが、一面扶養の義務も軽い。

明治二十七年、私の二十四歳の時、僅に月給十二圓の官吏になつて、地方の某役所に勤めて居たが、翌年の九月東京に轉任を命ぜられて、始めて都生活の境涯に移つた。三十一年の秋郷里から現在の妻を迎へ、東京青山に家庭

を作つた。

それから殆んど東京を離れないで、眞面目に勤続をし、又其間人並に昇給もして四十四年に月給八十圓になつた。之が私の最後の月給で、大正三年餘義ない事情の爲に退職を請うて、郷里へ歸つたのが私の四十四歳の時で、十五歳の長女を頭として、五人の子持ちであつた。

私は『他力』を信じないで、どこまでも『自力』でやらねばならぬと云ふ考へである。物質上の色々な苦しい事情に遭遇したのが動機で、俸給を割いて十四年間勤儉貯蓄をした経験を發表して見たいと思つたのである。

貯金の動機

田舎者の私が都會に赴任する事になつたが、當時まだ獨身であつたので、柳行李二個を持つて出發し、取敢ず下宿屋の一室を占めた。之が私の都生活

の初である。

東京は物價が高いと聞いてはるたが、今日とは違ひ物價も安く、薄給者でも餘程暮しよかつた。獨身でもあり、月給も追々昇給するので、決して經濟に不足はない筈であるのに夫れが不足勝ちであつた。當時私の理想として、官吏の生活は高潔でなければならぬ。清貧敢て辭せぬ。前途は遼遠である。金溜主義は卑屈なる。出世と貯金は相容れぬと云ふ風で、獨身生活の自由と血氣とに任せ、將來の考へもなく奇麗に費ひ盡くすのを寧ろ誇りし、貯金なきの觀念は更になく、下宿屋の拂ひに窮し、時には風呂錢もないところがあるが、一向平氣の平左で、恥も外聞も意しなかつた。

三十一年の秋、今に忘れもせぬが、俄に父の訃音に接して、歸國せねばならぬところになつた。處が旅費がない。窮策ではあるが、其頃私の郷里から東

京の某富豪に婚養子に来てゐる竹馬の學友があつた。私の上京後二三度往復もしたし、塾にゐた當時は至つて交際も深く、互に將來を契つたところもあるので、此の學友ならば無論旅費位は譯もなく貸して呉れると思つたが、さてさうも脚が重い。心苦しい。實は囊中いつも空乏ではあるが、未だ借金した経験がないので、案外臆病である。

そこで手紙で決心して、俵屋を走らしたが其の返事はこうである。「家憲として金銭の貸借は多寡の如何に係らず絶対に禁じられてゐる、悪からず思つて呉れ」云ふ意味であつた。

體のよい立派な斷りである。一時は嚇つたが仕方がない。「親でも金銭は他人である」はこゝだ。しかも事は急なり、背に腹は代へられぬ。役所仲間に——と思つたが最早勇氣もなく「合憎持ち合せがない」言はれるこ

結局恥ばかりかゝされて用は辨ぜぬ。世間は皆こゝうである。人は頼むに足らず、頼むものでない諦め、思ひ切つて私の所有物を始末して、やつこ間に合はせ、早々歸國をしたが、こゝう云ふ恥かしい辛い目に會つて見るこ、初の理想に缺陷が生じ、豫備金云ふものを持たねばならぬこ深く感じた。

閑話休題、父の生前中婚約もあつたので、今度歸郷の機會を幸に、約束を履んで、妻を同伴して東京に歸り、母に縋つて貰つてきた三十圓の金で新世帯を持つた。妙なもので一家を持つこ自然に理想も變り、自然世帯持ちこ變つて來たが、世帯を持つてからまだ日も浅いし案外費用も嵩み、日頃心に思つてはゐたが未だ貯金の實行が出来なかつた。

貯金の計畫

然し三十三年四月、私に取つて革命の時機が來た。夫れは一子の出生であ

る。

父としての義務、子に對する愛、いつまでも放縱な生活は許されぬ。其の日暮しは危険である。病氣をしても直ぐ金がある。子供の教育も必要だなき感じて來る責任が重い。さうしても先立つものは金で、貯金しなければならぬ決心した。之が直接の動機であつた。爲せば必ず成る。善は急げ、早速五圓を郵便貯金に預けた。之が一兒出生の翌月で、私の記念すべき貯金の初である。私は丁度三十歳で、月給二十五圓の時代であつた。妻は今日でも時に語るここがある『宅では子供の顔を見て始めて貯金をしました』と、全くである。實は決心が遅かつた。否、理想を誤つて、『勤儉』と云ふことに氣がつかなんだのである。各々儉を履き違ひなければ金を溜めるのは何の卑屈であらう。私の先輩の一人に、餘程年齢も違ふが、貯金の實行家、否力行

者がある。その人が私に忠告して呉れた。『一貫して貯金を實行するには多少の苦心はあるが、或る程度まで進行するに苦が樂に變る。夫れまで辛抱せよ。初から残りを積むと云ふやうな仕方では成功せぬ。残りではない。残すのである。りこすの一字違ひで大に効果が違ふ』と。なる程その位の覺悟はなければならぬと思つた。そして『お互の位地境遇より打算して見るに、貯金の出來る期間は丁度子供の小學教育の時代である。中等學校へ入れる様になるに、教育費が嵩んで、収入が之に伴はぬから思ふ様に貯金が出来ぬ』と實驗上の話もして呉れた。こんな實驗談より計算するに、將來約十五年、私の四十五歳になる時分である。此の十五年間を先づ第一期間と定め、初めの五年間には是非基礎として千圓位貯金して見たい、さうすれば利子も目に立ち、樂みも増すだらうと思つた。それから永久の實行には夫妻協同一致でなければ

ならぬ。寧ろ妻の努力に俟つものが多い。幸に妻は田舎出で、働くことは毫も厭はない。同僚の妻君の流行の衣服も羨まない。無論貯金には賛成で、私に取つて最も力強き點であつた。一番の問題はどの位残すか云ふことで、之が仲々むづかしいが、既に實行の時機も遅れて居るのであるから、大奮發をしなければならぬ。未だ子供も一人であるし、將來殖えても、収入も亦殖えるであらう云ふ豫測で、詳細に收支の豫算を立てた。其の結果不時の出費は別として、兎に角俸給の三分の一丈け残して見よう。尙年末賞與や出張旅費の残りは豫算外として、直に貯金に組入れることにした。

生活の改善

勿論私の洋服、靴、子供の衣服は別だが、夫婦の衣服は當分作らない事にした。妻も勿論同意である。經濟學の原則に『入るを量り出づるを制す』

云ふことがあるが、一定の収入に依る俸給生活者としては、入るを量る云ふことは困難である。さうしても出づるを制する方法しかないを考へた。以上の方針で實行の域に這入つて、先づ日々の出費即ち經濟に注意を拂ひ、面倒でも物品は現金で買ふ。商人が月末でよい云つてもこちらから拂を持つて行く。通帳は一切受取らない、洋服などは注文するのに、現金拂にする云ふは、少くも一割以上は安い。現品も早く持つて来る。勝手の買物は殆んど外に出て買つて来るのが妻の仕事である。安いと見たら買溜もする。日々の献立は營養本意で量を取り美を撰ばない。來客の接待も義理を缺かぬ程度で料理屋などに注文するやうなことは極めて稀である。勝手の都合で夕食が不足したり、副食物の間に合はぬやうな時には、散歩がてら例の縁日へ親子で出かけ「いろは」や「蕎麥屋」式で慰勞兼利用晚餐を済まして来る位である。

晩酌は呑む時もあるが呑まぬ方が多い。左程慾望もない。住宅も成るべく郡部を撰んだ。或る時は役所まで一里半許りの距離があつた。ここもあつたが、雨が降つても風が吹いても徒歩主義で、無論腰辨である。之は經濟許りではない。運動の目的もあつた。歸宅するに不味い物でも旨く喰へる。内に居る妻も勝手さか、子供の守さか、裁縫等随分運動が良いので、夫妻共に健康で嘗て醫者の見舞を受けた事はなく、一家は平和である。子供のやうな話だが時々通帳の現在高を眺めるを唯一の楽しみとして居た。

成 績

こんな調子で儉約を計つて、豫算を厳守し、實行の域に入つてから滿五三十八年の六月利子の記入を受けた時の現在高が妻の分を合して千圓強あつた。妻は當時云つた『其の筈でせう、年末賞與や旅費の残りでも、現金は見

た事がない』と案外金高が少ないやうな顔であつた。全く賞與や旅費の残り、私の服の衣囊に入れたま、で、翌日出勤の途中に郵便局へ行くのが常であつた。

最初の貯金から六年目の秋には、月給も既に四十圓昇給し、子供も亦一人殖えて二人になつて居た。詳細に記憶はせぬが、前記の現在高約千圓の内五百五十圓が俸給より残した勘定で、其他は賞與、旅費の残、利子等で、五年間に於ける俸給の収入高と貯金高とを對照計算して見るに、俸給から七分の二だけ貯金した結果となるが、家族四人の生活を支へて、世間の義理、同僚の交際もあり、之れ以上の成績は得られなかつた。幸に豫定通り既に貯金の基礎も出來、意志も益々強固で、利子もまごまり、楽しみも増して愈實行を期したが、之が恒例となり、常態になつて見るに、何の苦もなく知らず識らず

増加する一方で、一旦貯金したら決して引出すこと云ふことはせなんだ。通帳といふものは預ける道具で、引出す器でないと思つた程である。

運 用

四十一年頃思ふ、貯金局から通知が来た。一人千圓以上（現在は制限二千圓であるが）は規則として貯金が出来ぬ。公債を買ひなさいと云ふ奨励であつた。此頃公債の額面百圓のものが八十圓位で買へた。公債ならば政府の事業だから、安心で間違ひがない。利廻りもよいので、額面千五百圓分買つておいた。

其後桂内閣時代と思ふ、公債の償還が始まり反対に百圓以上に騰貴したので、皆賣つた。なんでも三百圓程利益があつた。此の時は私も妻も嬉んだ。實は生れてから始めて、金儲けと云ふことをしたのである。

これから運用と云ふことに非常に興味を覺えたが、丁度此時鐵道證券を三ヶ月と云ふ短期で募債があつた。利子の割合もよいので、公債を賣つた金で直ぐ日本銀行へ買ひに行つたら、利子を先に呉れた。利子と云ふものは後で呉れると思つてゐたから、これは意外であつた。三ヶ月の後證券が償還になる。こんごはぎの方面に運用しようかと色々思案中、丁度郷里から妻の父が日光見物に来て私の家に逗留した。幸に相談して見たら、多少腹案もあつたらしいが、郷里に地所を買へると云つた。固より希望もあつたので、萬事を托した。都合よく償還になる頃、畑一反歩許り千圓で買つて呉れた。尙残りで勸業債券も二百圓買つた。子供三人に將來教育基金として、一人に二百圓宛十年据置貯金もした。

其後もこんなことを繰り返して、私の覺束ない知識を搾つて、種々運用を講

じたが、苟も危険の伴ふ株などは決して買ふ氣になれなんだ。其の代り利益は少ないが、嘗て損はしなかつた。

過去を振り返るゝ夢の様で、十年の月日もいつか過ぎて、終始一貫貯金を以て生命として居た私の身の上に取つても障害なく、人にも遅れず昇給もして四十四年には月給もやつゝ八十圓となり、子供も亦四人となりなつて居た。

然るに大正三年六月私の身の上に異動が來た。餘義ない事情の爲に退職を請ひ、郷里に歸つた。私の四十四歳の時で十五歳を頭に五人の子供があつた。

貯金の賜

死ぬまで貯金をするやうな精神でゐたが、人生の行路は決して平坦ばかりはない。こゝとも思ふやうにはいかぬ。嘗て十五年計畫を立て、實行を期し

たにも拘らず、身上異動の爲に豫定より一年間短縮せられた。退職まで過去十四年間に於ける成績を舉げて見るに、貯金總高實質五千圓餘りであつた。

三十八年に基礎が出来てから九年間、同じ方法を執り、時に風雨に遭遇したが、針路に迷はず、力行して來た自然の結果であつた。但し此の期間には運用利得が與つて力あることを忘れてはならぬ。私の進退に伴ひ貯金の實行も十四年を一期として茲に一段落を告ぐるべく餘義なくせられたが、此の貯金があつたお蔭で退職後もこれだけ力強かつたか知れぬ。僅少の恩給では到底收支償はない。況して當時長女は女學校に進み、長男も次の子供も、順次中學校へ入れなければならぬ。愈々教育費も多端の秋となり、決して儉安は許さない。私の再職は當分氣が進まぬ。そこで百尺竿頭一步を進め、此の貯金を資本として、更に第二期運用を講じ、収益を劃つて見ようゝ覺悟した。

丁度退職當時、即ち大正三四年頃は一般不景氣で、諸物價が非常に安い。殊に土地、材木、手間賃の如き絶頂に云つてもよいので、色々研究の結果、此の機會に先づ自分の住居を建てる序に貸家五軒を建てることに決心して、先年買つておいた畑の外に、宅地百三十坪許りを買ひ増して建築を經營した。此時の豫算が土地千圓、建築費六軒で二千五百圓であつた。今より對照して見るに霄壤の差である。大工の日當八十五錢、日傭六十錢に云ふ値段から言つても思ひ半に過ぎぬ。漸く豫定通りを遂行した。本は小さかつたが、此の掉尾の運用が最も適中して、大正四年春建築竣工の頃より漸次騰貴し、今日に於ては安く見ても三倍以上、價格にしても一萬五千圓の實價を生じて、此の價値に對する利益を現に收得しつゝある。

要するに二十五圓の月給の時に僅五圓の貯金を振出しに、十四年間月々若

干の膏血が積り積つて五千圓の額になり、更に之を運用して一萬五千圓以上の不動産を生産した。富豪の眼からは此の端金に冷笑せらるゝ、であらうけれども、薄給の官吏が一定の收入から正當に貯蓄するのには之でも言ふに言はれぬ克己努力があつた。五人の子供を養育しつゝ、出産時以外人手を頼まずにやつて來た妻の努力を見ても感慨は深い。

大正七八年頃末の恐しい物價昂騰にも、此の収益が有力な家計の補助となり、幸に生活の脅威を免がれた。一家の無事な時の運もあつたが、洵に貯金の賜である。

三、七文から五萬圓 (二等當選)

北海道札幌區山鼻町行啓通

小池 九一



小池九一氏

十歳の初奉公

私は信州の松本に生れ、親は相當の財産もあつたから、子供の時は別に不自由もなかつたが、私が八つの時、両親は私を連れて伊勢參宮をした歸途、ふさした事から横濱で洋銀相場に手を出したのが、悉く失敗に終り、之を回復しようとして東京に出て、又ぞろ慣れぬ米相場に手を染めたから、勿ち大損をした。母はそれを苦に病んでか、私の九

つの年失くなつたのである。續いて翌年私の十歳の年の十月には父も亦失くなつたので、私は全くの孤兒となつてしまひ、泣く／＼國元へ歸つて見る／＼、親類の一部に善くない人があつて、父母の留守中に家の財産を横取りして仕舞つたから、その時は父母のない孤兒の上に、一文なしの貧乏人になつてしまつた。仕方がないから其年の十月紙商店に奉公をした。

奉公云ふものはつらいもので、朝は早く起こされ、夜も亦勝手には寝られない。其中に寒さは段々強くなり、雪も降り出して、手にはひびがきれるにはあかぎれが出来ても、誰あつていたはつて呉れるものもない。其のひびのきれた手で毎朝拭掃除もせねばならず、其のあかぎれの足で雪の上を歩ひ走りせねばならぬ。子供心に其の難澁がしみ／＼こたへた／＼見えて、風の氣味で病の床に就いた。主人は親切に世話して呉れるが、何分親のやうな

温みはない。うす暗い丁稚部屋に這入つて、夜毎を病の床に泣き明かした。泣き／＼思ふには、他の小僧はお母さんがあるから、病氣をしても實家に歸つて大切にしてもらへるが、私は何處へも行く處がない。そう考へて見る／＼無暗に心細くなつて來たが、其時この辛さでふ／＼思ひついたのが貯金である。こんな／＼をいくら考へて見ても仕方がない。貯金してお金が出来れば、病氣になつても、災難に出會つても鳥渡も心配することはない。自分の境遇に刺戟されて、小供心に之は一番貯金をして見よう／＼かかふ氣になつた。

母の遺物の七文

愈々貯金しよう／＼思つても年期小僧の身の上では貯金する金がない。そこで自分の古葛籠の中を探して見る／＼、底に一の古巾着があつた。之はお母さんが、何時もお寺參りに持つて行かれた巾着で、之は母の遺物だから大切に

せよ／＼いはれた／＼に心付いて、早速其の巾着を開いて見る／＼、中に一文錢が七つある。併し七文では貯金は出來ない。何處の銀行でも一錢以下は預からないが、子供心の一心で考へ出したら頻りに貯金がしたくてたまらないから、七文を持つてすぐ主人の處に行き『さうぞ之を一錢に換へて下さい』と頼む／＼、主人は變な顔して『それを一錢に換へてさうする積りだ。饅頭でも買つて食ひたいのか』と叱るやうに問ひかけられたので、私は泣きながら、『さうではありません。私は貯金がしたいのです』と云つて自分の考へを右りの儘にお話する／＼、主人は私の顔をつく／＼と見詰めて『さうか、お前はほんに孤兒になつて、たれも世話して呉れるものがないから、心細くなつて貯金でもしようか』と云ふ氣になつたのか。善く其處に氣が付いた。そうぢや、貯金さへして置けば、安心だ。さう云ふ事なら己が替へてやる』と云つ

て、持つて来て替へて呉れたのは、一錢銅貨でなくて、十錢銀貨であつた。私は幾度もくおしいたゞいて受け、此の嬉しさで病氣も忘れるやうによくなつて、喜び勇んで松本郵便局に駆け込んで預入の手續をした。即座に立派な通帳を渡された。此時の悦び云ふものは、本當に天にも昇るやうな心持であつた。之がそもく私の貯金の始めで、即ち明治二十年の十二月の事である。

丁稚時代の貯金の財源

弱年で、殊に年期奉公の身の上では給料はなし、如何して貯金を殖やそうかご暇さへあれば考へた。先づ第一に正月や、お盆の十六日に、主人から戴く小遣錢、それから其日親類巡りをするこあちらの叔父さん、こちらの叔母さんから三十錢五十錢こお小遣を下さる。之を他の小僧は菓子だ、芝居だこ

財布の底を拂ふて歸るのであつたが、私は見物食物には一錢も費さずして持ち歸り、主家に報告して手帖に記入し、翌日は郵便局に貯金したのである。第二には主家の使先からいたゞいたお金、第三には祖母から頼まれて、主家で用ゆるお茶の出しがらを貰つて、之を水で洗ひ笊にならべて日光で乾し上げ、祖母が主家を訪れる毎に私に勞銀をくれて、持ち歸つた。

かうするここ四年に及んで、祖母は死去の際、之を棺桶の詰物にされたが子供心に貯金を殖やしたい一心で、斯んな仕事もいやこも思はずに永い間續けたのであつた。今から考へるこ、此の勞銀なごは當時最も有力なる財源の一つであつた。第四には主家の業務にだんく精通してきたから主人の許しを得て毎年春先になるこ、貯金を全部拂戻して、主家が商品を仕入れる時、私も貯金で足りるだけ仕入れて主家の倉庫に預けおき、お盆前後になるこ毎

年何割かの騰貴を見るので、之を適當な時期に賣却しては、其の利益を貯金したのである。年々こんな事を繰り返して貯金の増殖を圖つた。第五には自分のものは衣類のほろ迄も貯へて、之を古物商に賣拂つて貯金に加へた。其他拾得金で遺失者がなくて警察から下さつたお金なきもある。

奉公中の慈善寄附

私が十三歳の時、主人の云ひ附で、家賃の取立に行つた。其の家には老人夫婦が住んでゐる。十二月もおし詰つてからの事、戸を開けて這入つて見ると、お爺さんは病氣で寝てゐる。お婆さんは單衣か袴か知らないが、只一枚で其の枕元に震へて居る。元より藥もない。粥もない。老人夫婦は進退谷つて、泣いて居る處に飛び込んだ。實に目も當てられぬ憐な有様で、家賃ごころの話ではない。夫れを催促に行つた私は、何にも言はず其家を飛び出して

主家に歸り、早速貯金を引出して三十錢の金をもつて再び其家に行き、これで何か買つて下さいと其の金をお婆さんの手に渡す。其れを受取つて私の顔を見た時の婆さんの悦びは何ともものに譬へ様がない程であつた。又頭の上らぬ病人が、其の聲を聞いて起き上り、老人夫婦が共に手を合せて拜まれた時の其顔つきは、今でも目に残つて忘れられぬ。

此時から慈善ご云ふ事に志し、二十三歳迄十三年間の奉公中、ごこそここに大火事があつて人が難儀をして居ると云へば、直ぐ貯金を引出して其處に寄附する。又大水が出て家を流された者がゐると云へば、直ぐ其處に義捐をする。或は又軍人や警察官が職務の爲に負傷したと聞けば、直ぐ見舞金を贈る。かういふ風に慈善や公共の爲に寄附した事が前後七十余回に及んでゐる。

二種の通帳

私が當時小僧の身でありながら、さうしてかう屢々寄附や義捐が出来たか
と云ふに、私はいつも貯金をするこき、之を二つに別けてゐた。例へば十錢
の貯金をするなら其中八錢は自分の爲の基本貯金、あとの二錢は慈善貯金と
各通帳を別にしてゐたから、いざと云ふ時直ぐ其の慈善貯金を引出して寄附
する事が出来たのである。之は全く私の考へ付いた貯金の仕方、畢竟自分
が孤兒となり、難儀をして始めて思ひ付いた貯金であるから、同情相憐むの
理によつて自然と慈善の事にも及ぶやうにも成つて來た。

貯金の初穂で親の墓碑

爾來十三年此家に奉公したが、其間非常の儉約をして、さうく二十三歳
の時には、百四五十圓の貯金が出来た。之に主家より首尾能くお暇を貰ふこ
同時に、金百圓の賞與金をいたゞいた。そこでつくづく思ふには、かう何時

迄も信州の山の中にぐづくしても仕様がなない。こゝは一番他所へ出て一奮
發しなくばなるまい。然し東京や大阪に行くのは面白くない。これは一つ北
海道に出かけて行つて、一仕事やつて見よう。北海道は未開の地だから奮發
次第で必ず成功するに違ひないし、かう決心して、其の準備に取りかゝつた
が、先づ第一に買ったものは、亡き父母の墓碑である。素より孤兒一物の遺
産もなき小僧の身の上で、兩親の墓も十三年間建てないのをかねて、残念に
思つて居たから、愈々國元を出發し決心するに、先づ貯金を引出して兩親の
墓碑を建て、其の前に踞つて暇乞をなし、残りの金も、衣類や不用品の賣
却代を一冊の貯金通帳にまこめ、愈々出立の準備に掛つたのである。

北海道移住

住み馴れた故郷を離るゝのであるから、業若し成らざれば死すとも歸らず

こ石より堅い心であつたが、誰一人賛成するものはなかつた。彰善會員や青年會員の送別會を受けて、愈々明治三十三年の五月五日を以て、一人の知己さへない北海道に向つて旅立したのである。此時の旅装は紺の筒袖に草鞋がけ云ふいでたちであつた。

貯金の有難味

無資孤獨の一青年が志を立て、郷關を出るに際して、他人に金銭上の迷惑をかけず、長途の旅行をするにふ方針を立て得たのは、貯蓄の精神を一貫して、其の目的を過らなかつた爲めであつたと思ふ。又出發前亡き父母の墓碑を建てられたのも、貯金の賜である。北行の途路善光寺に參拜し、特に東京に出て宮城を遙拜して、陛下の御高恩を拜謝し、五月十日時の東宮殿下の御慶事御參内を櫻田門外に於て奉拜し、千載一遇の光景を拜して、北へへ

こ旅中の人になつたが、いつも私の心から離れぬものは、貯金の有難さであつた。

奇遇

五月十四日には北海道の人になつた。先づ本道に於て奮闘して、一事業を爲さんとするには、道内の状況を視察するにしかず、かう考へた。函館より海路小樽に出て、更に札幌に來て方針を立て、二ヶ月を費して渡島、後志、膽振、石狩、天鹽、北見の六ヶ國を視察し、出立の際百七八十圓あつた財産が旅費に費されて、非常に智識は増したが、お金は僅かに四十圓餘に減じた。

愈々これから奮闘して自活の途を講じようとしたが、其時或る人の紹介で空知支廳長を官舎に訪問した。此時の私は元より理想も低いものであつたし、

學歷は更になし、先づ勞働による事を希望した。幸支廳長は在宅で、面會が出来たから、斯々云々一應の挨拶を述べ、私を郵便か新聞の配達人か、若くは役所の小使にでもお世話を願ひたいと申して、尙私が茲に持参しましたのは丁稚奉公中公共慈善の事に寄附や義捐をして、諸方より戴いた禮狀や、感謝狀が澤山あるから十五六通持参致しましたが、之は私の身元證明迄に御覽を願ひ度いと差出すと、支廳長は稍迷惑さうな顔付で見下すつた。するところ一通の手紙を聊か驚かれた様な態度で表や裏をながめられた。私も首を延して見るに神田警察署長が下された吉留巡查の見舞金の禮狀である。神田警察署長山田有斌、此の支廳長も山田有斌、さては同じ方ではあるまいかと、背いたとき、支廳長の方から『これは妙だ、私の書いた手紙です』と云はれて、私も其の意外に驚いた。更に支廳長は語を次いで、『私が元神田警察署長

時代に、部下の吉留藤太郎と云ふ巡查が、明神山で強盜と闘つてピストル二發を胸間に打たれ、血まみれになつて組み附いて、トウ／＼其奴を捕り押へた事件があつたが、職務の爲に身を捨て、盡したと云ふところから、非常に世間の同情が集まつた。其時私が可成自筆で禮狀を出した事がある。此の手紙は正しく其中の一通だ』と聞いて私も今更の如く驚いた。支廳長は『かう云ふものを見たからは、他は見る必要がない、私は鹿兒島、あなたは信州の人で、互に未だ一度も見つた事も聞いた事もない者が、北海道の地で偶然相會するに云ふことは實に千載の奇遇である、其内に何か仕事もあらうから、兎も角も今晚からの家に來るがよい』と親切な言葉に従つて、其夜から、山田家の客となつた。

十九歳の秋報知新聞の記事に吉留巡查の勇敢なる行動に感じて、金三十錢

を見舞として寄贈したのが基となつて、圖らずも立脚の地を得たのである。

雇時代の貯金

商店の番頭であつた私が、俄に高等官の家の書生になつたので、嬉しいやら心配やらで二晩三晩は睡れなかつた。必ず山田家では當分此の私を試験なされるに違ひないと思つて、朝早く起きて、水汲から拭掃除、ランプ掃除から草取りまで一生懸命に働いた。朝夕主人夫婦から喜びの聲が洩れて来る。先づ書生の試験にはさうやら合格したかと思つて居るに、七月十七日付で空知支廳に雇に採用された。始めて戴いた八圓の給料を一旦亡父母の靈前に供へ、それから山田家の奥様に此の八圓を食費としてお受取を願ひ度い差出すに、主人は是迄幾人もなく書生や女中を使つたが、あなたの様な、善い人に

出逢つた事がない。食料どころか却つてこちらから上げなければなるまいと思つて居るに申されて、さうしても受取つて下さらぬので、此月から自活した外に月々七八圓の金が出る事になつた。北海道に来てからの金の基礎は旅費に遣つた残りの三十圓であつた。

貯金と信用

私が渡道の翌年、即ち二十四歳の春の事であつた。私が役所に勤むる傍林業に就て研究して居たが、國元の或る財産家が之を聞いて私に突然金百圓の金を配達證明書留郵便で送つて來た。そして其の手紙に『君は林業を行なうのだが、君の事ならきつて成功するに違ひない。然しまだ資本があるまいから僕が手傳をしようと思ふ。此の百圓は其の手始めに送つて上げる、尙此後も段々必要だけは送ることにしよう』と如何にも親切な手紙が來た。私は

其のお金を一旦有難く受けて、直にそれを銀行に預け入れ、一ヶ月立つてから其れを引出して利息を附して、元の送り主に返へして仕舞つた。それには又丁寧な禮狀を添へて『誠に御親切は有難いが、只今は入用がないから一旦お金はお返へし申す。何れ他日入用の節は再びお願いも致しませう』と綺麗に其の金を返してしまつた。

内職貯金の實行

私が北海道の新天地で奮闘するのは、此時からであつた。一家再興の重任を荷つて居るから、心はいつも張りきつてゐる。何でも成功は勤儉努力と忍耐と制欲とにあると信じて、私は晝は役所に勤め、朝夕は山田家の雑用を働いても、尙晩に二三時間は暇がある。此の利用法を研究した。

當時主人の支廳長に、北海道に勤むる薄給の官公吏や、其の家内なごは大

凡如何なる内職をしてゐるかを聞くに、支廳長は笑ひながら『未だ北海道ではそんな殊勝な考へをもつ者はない、恐らくは君ぐらゐなものだらう』と云はれて、聊か驚いたが、私は一層の興味を以て、毎夜二時間宛野紙刷りの内職を始めた。

茲に面白い比較が出来た。當時村井商會から販賣する巻煙草のピンヘットが一つ五錢で、私が一時間野紙刷りをするに其の賃金も五錢、岩見澤の場末の土地が一坪五錢内外で買へた。さうするに私は毎晩二時間の内職で土地二坪づゝ買へるのであるが、毎日支廳に出勤して見るに十圓内外の薄給者で、一日にピンヘットの二つも三つも吸つて居る人を見受けるのであつたが、之等の人はつまり毎日二坪三坪の土地を空しく煙にして居る譯で、これでは生涯貯金なごの出来やう筈はない。私は薄給者として、當時北海道で卒先して内

職を實行し始めた。そして内職貯金で一つ土地を買つて見度いゝ考へた。其の方法として一枚の白紙に一萬坪許りの碁盤目を造つて、其の目一つが土地一坪を假定し、毎夜二時間の仕事が終るに、初日は二目を赤くぬる。二日目にまた二つに云ふ風に毎晩やつては、今夜は土地幾坪の所有者となりましたに、亡父母の靈に感謝しては寝るのであつた。塵も積れば山となるの格言の如く、斯くする事足掛三年となつて、實に三千幾坪か買へる様になつた。其時五千坪が三百圓に云ふ賣地があるに聞いて、不足金は一時基本金から足して買つて置いた。此の實行は後には大分同僚間の人々の参考ともなり、貯金は大切なもの云ふことを覺えた人も出來たやうに思ふ。

金森先生に知らる

三十五年の八月頃であつた。札幌から園田長官に金森先生が、岩見澤に

見えて、劇場で勤儉貯蓄の講演があつた。其時山田支廳長のお伴をして拜聴に出掛けたが、多くの人の却々出來ないなあに云ふ聲が聞えるが、私は心中得意で、益々其の實行を心に誓つた。翌朝支廳長の紹介で、金森先生に旅館で面會した。ところが先生は非常に喜ばれて、私の幼少時代からの貯金の話を數時間に涉つて聴き取られたので、先生に大層懇意になつて、其日は別れた。そして一ヶ月程たつて、金森先生から小包で『貯金のはなし』に云ふ立派な本が五冊來た。お手紙には『今度あなたの貯金の實行された事の概要を本の中に紹介しておいたから承知してくれ。尙益々今迄の精神を廣く永く續けて貰ひ度い』に希望されてあつた。見れば貯金の實例中に孤兒の貯金として十二頁も紹介されてあつた。そのみならず、金森先生は各地で講演の材料に供せられたのである。又間もなく私は豫て彰善會長として知遇を辱うし

た、帝室御歌所長男爵高崎正風閣下よりも左記の如き和歌を贈られたのである。

貯金のはなしを一讀
して小池九一ぬしの
行爲に感じてよめる

たくおゝる徳の光りも積たてし
こかねこゝもにあらはれにけり

正 風

唯恐縮するの外はない。愈々責任の重きを痛切に感じて「人生に貯金の目的」に云ふ事を研究し、努力するやうになつた。

判任待遇時代の貯金

三十五年の九月、山田支廳長は岩内支廳長に轉任せられ、私も隨從して岩内支廳に轉じて事業手を命ぜられた。

その一年前、私は山田氏夫妻の世話で、妻を迎へたのであるから、今度は

夫婦とも岩内の山田家の世話になり、我々兩人は山田家の家政を預つて、同家の貯金増殖の事にも全力を盡くしたのであつた。滿一ヶ年目に、私は北海道廳に出向を命ぜられた。私は意外であつたが、承れば支廳長の方には約六ヶ月も前から、園田長官の懇望があつて、山田支廳長も恩師たる長官の切なる御申込みであるから、此上は自家の都合を顧みておられぬ事あつて轉勤の發令をした譯である事詳細を承つて、親に別れるやうな思ひがして、夫婦は泣いて同家を辭したのであつた。

道廳に着任して長官に面會するに「役所に在つては長官官房參事官附として、貯金奨励の仕事をして貰ひたい。そして君方夫婦は今日から私の官舎に同居し、君が山田家に於けると同様に園田家の家政を擔當して、私の家にも君の様に貯金の出来るやうに盡力して貰ひたい。何分頼む」に實に思ひがけ

ない大命が下つたのであつたが、謹んで御受をして、夫婦は懸命に働いた。幸その月から相當の貯金が出来て、聊か面目を施した。

その後北海道廳屬に任用され、給料も漸次に多く戴くやうになつたが、貯金の精神も益々旺になつて來た。園田家でも又吾々夫婦の食費を取つて下さないから、夫婦は園田家の執事役を勤むる爲に自活し得て、給料の大部分は貯金する事が出來た。尙多少地位や財産が出来ても決して元を忘れておらぬ。長官邸に居ても、夜間は野紙刷りや、巻紙つぎを内職して居た。

長官より表彰

小池 九一

明治十一年一月廿四日生

平素業務に勤勉にして一家舉て節約を守り克く勤儉貯蓄の模範を示したる段奇特に候事

明治三十九年九月一日

北海道廳長官從三位勳二等男爵 園田安賢印

貯金の運用

明治三十七年、私の二十七歳の年、長官邸にお世話になつた二年目には、私の財産は三百圓で買つた岩見澤の土地に郵便貯金が五百圓まであつた。之から貯金の運用に意を用ひた。當時私の研究としては、土地を買ふに云ふ事が一番安全を考へた。次に土地の將來を云ふことを考へて比較して見た。札幌か信州か東京か、さうも東京が良いと思つた。或時上京の序に、山の手邊

の土地の賣物のあるを聞いて、六百三十五坪の土地を二千三百五十圓で買った。併し金は五百圓よりない。それで不足金を信用で貸して下さる人が出来て、恙なく買ひ求める事が出来た。かうして三百圓出来れば土地を買ひ、五百圓出来れば土地を買ひ、又東京の地所を抵當として勸業銀行から千六百圓を借りてまた土地を買った。

話が少し變るが、明治四十年に長官の榮轉と同時に、同家を辭して、一年餘り立つたが、明治四十一年の十二月札幌に北海道廳立感化院の創設と同時に、私共夫婦は不良少年の父母となつて教育の任に當つて貰ひ度い云ふ、時の長官からの命令があつて、又々非常な重任を御受けする事になつた。渡道以來十五六年の間に其の運用宜敷きを得て、東京、札幌、岩見澤に於て土地口數五筆合計一萬五千八百坪を所有するに至つた。

一粒萬倍の實驗

大正元年の正月、大正年代を記念し、一は貯金思想養成の爲、信州に赤松の種一升を注文した。種代は小包代で一圓で来た。之を蒔いて生へた松は約一萬五千本もあつた。約一萬本は二三年生の時代に神社、佛閣等に寄贈した。残りの五千本は生々成木して、今は二千坪の地に小松林が出来て居る。今假りに一本二圓と見れば一萬圓なるので、是等も一種の面白い貯金法ではあるまいか。

渡道以來の慈善寄附

私は渡道以來も郷里に居たと同じやうに、不相變寄附や義損を續けてゐる。重なのを二三を擧げるに、信州松本の大火に五十圓、松本の公園に二十圓、札幌神社に百二十圓、濟生會に百圓、山鼻小學校に五十圓、東京の神道

中教院に百圓、日本赤十字社北海道支部に御眞影奉置所一棟(千圓)東京氷川神社に百五十圓、其他枚舉し能はず。尙一家族十名悉く赤十字社員にして女子は愛國婦人會員なり。

七文から約五萬圓

私は少年時代からの望みであつた、獨力で慈善事業を始むる時節の到來したのを心の奥底から喜んだのである。大正八年中に愈々土地賣却に決心し、漸次賣却したが、東京の土地は一萬二千圓に賣れ、其他全部を賣拂へば約五萬圓の正金を得られたのである。併し自分は七人の供があるから、是等の教育費だけは頒け與へなければならぬ。之は恩人の意見に従つて、札幌の畑地五千坪、時價約一萬五千圓を子供七人の教育費として頒つ事にし、残りの三萬五千圓即ち私の全財産を擧げて、私立感化事業に投ずる事にした。之が私

の四十二歳の年で、七文から五萬圓に殖えた年代は實に三十三年を夢して居る。

私立札幌報恩學園

時代の要求である所の、理想的感化院を創設し、土地建物、什器に全財産を投じ、全設備の完成をまつて之を財團法人となし、之に寄附する精神で目下其の準備中である。

大正八年五月五日、私が二十年前郷里出立の記念日に此の報恩學園の開園式を擧げ、既に十八名の生徒を收めてゐる。

貯金と健康

精出せば氷る間もなし水車の格言の如く、私が渡道以來二十二ケ年間、随分極端な身體の使ひ方もしたが、今日迄之ミ云ふ病氣に犯された事はない。

酒と煙草と茶とは生れてから今日迄用ひない。之は貯金を殖やしたい爲ではなかつた。さうしても成功者となるには、健康な身體の所有者ならねば駄目だ。健康を望めば有害な物を口から通さぬ事が肝要である。かう考へて、遂に欲望に打勝つて來た譯である。

感謝の半生涯

人間八十の壽を保つ事が出来るを假定するに、私の前半生涯は勤儉努力の半生涯であつて、不十分ながらも、貯金によつて身を立て家を興したので、目的を遺憾なく達した譯で、今より後半生は進んで國の爲、人の爲に働くので、眞に感謝の生涯が送れると思ふ。廳立感化院長も今尙兼務してゐる。現在の私は、實子七人、廳立札幌學院の職員生徒四十五名、私立報恩學園の職員生徒二十六名、外に多年教養して成績善良で退院した生徒約五十名を加へる

に、實に百名以上の子供からお父さんと呼ばれる譯で、北海道で平和な大家庭が實現されて居る。

四、勤儉の生涯 (三等當選)

福岡縣築上郡八屋町

齋藤捨子



齋藤捨子さん

成せば成り成さねばならぬ成るものを
成らぬ云ふはなさぬなりけり。この格
言こそ誠によく云つたものでございま
す。

これに就きまして、私の貯金實驗談を認めて見ませう。

私の生れました所は、片田舎の商家なので、物覚えがつかましてからは、
金に不自由云ふ事は一寸も知りませんでしたから、貯金はすべきものとも

又必要なこととも、楽しみな事とも思ひませんでした。處が學校に通ふやうに
なりまして、一學年の修業式に、優等生三四人が郵便切手を七錢だけ頂きま
した。そこで私は郵便局に初めて行きました。それからだんく先生から貯金
は必ずしなくてはならぬ事を分かり易く、修身其他の學科で教はりました。一
方學校では兒童に貯金思想を與へる爲、何の賞與でも皆郵便切手ばかり渡さ
れるのが例となつて居りましたので、優等生は貯金高が多いのでした。或
時は害虫を取つて、幾錢かの郵便切手を頂き、其度毎に通帳の計算をして高
の多くなりますのが、何よりの楽しみでございまして、別段金は必要なものこ
は考へもせず、唯優等生誰々はこれく貯金高がある。皆さんも勉強して優
等生になると同時に、貯金高を増さん事を望みますこの、お言葉に一心に勉強
して、三月二十四日の修業式が楽しみでございました。或時は郡長様、知事様

よりも

賞状に郵便切手を添へて

いたゞいたりして、八年間の卒業の時には五圓幾錢かの高きなりました。其後もいろいろ小遣錢の内を幾分なり貯へて居りました。其内女學校に入學致しまして、或る夏休に金は却々たやすく得られないものだ云ふ事を切に感じた事がございます。

それは或家の裁縫物に取りかゝりまして、朝の勉強後から暑い〜日にもかゝはらず、一心に汗水たらして午後五時頃まで針を動かして、やう〜出来上りましたのは一枚の絹布の袷でございました。其の縫賃として貰ひました金は二十錢なのでした。もつとも今時とは違ひまして、白米が十二三錢の時でございますから、有難く思つたのですが、其の苦しみをして得られたお

金を、さうして遣はれませう。すぐ貯金にいたしました。こんなやうにしまして、勉強のひまには針の手を動かして、四十日間の休の中に六圓あまりのお金を貯へる事が出来ました。それで小學校の時から分こ合計いたしますと、かなりの、子供ではお金持ちだ喜んで居りました。

其頃は田舎から寄宿舎にまで入れて、女學校にやる家庭はほんこに小數のもので、又入學した方も極く儉約にして、なるだけ父母の許より送金して頂かないやうに心がけて居りました。舎監あたりも之を喜んで居られました。又親の方でも餘り金ばかり要れば永くは續かないから、退學させるこの話で出来る限りは節儉いたして居りました。

其頃丁度科外に造花ミツマミが流行いたしましたして、都會の女學校では皆教へて居るこの先生のお話でございましたが、校長を始め諸先生も却々良い

事だけれぎ、餘り材料に費用が多くかゝるから、考へものだが、父母に相談の上許しの出た人は、此の限りではないこのお話してございました。けれども親の許に此の上また金をお願いする事は氣の毒に思つて、又許しの出る理由もないとあきらめて居りました。併し私は非常に習ひたひと思ひまして、早速その事を父母の許に相談しました。處がやつぱり餘り金は此の上出したくないやうな返事でございました。それもさしあたり必要な學科ならごもかく止めた方がよくなるかしら。併し

お前の貯金で習ふ

氣があれば、それはよいこの事でもございましたので、其時の貯金の有難さつたらありませんでした。そしてこの動機こそ、私に貯金の必要と云ふ觀念を與へましたのです。それで難なく望みの通り習ふ事が出来ました。

其後も人様の裁縫物なごを頼まれるまゝに、暇々に縫つて、少しなりごも貯金して居りました。かうする中に卒業しまして、同窓の人は高等教育に進む人、家事に手傳ふ方ご、皆離れくゝになりました。私は其頃に又望みの學校がございましたので、相談いたしました。當時は折あしく父が眼病の爲三四年間も休んで居りましたので、思ひ止まつて小學校になりご奉職せよと申しましたが、さうしてても今一度志すまゝに勉強してみたく思つて居りました。處が母が申しますには、お前がまたそんな望みがある事ご思つて、自分の小遣の幾分を貯金して居るから、學費の半分を父に相談して見てやるご申しまして、やつご始めて許しが出来ました。天にも昇る心持ちで上京して、某音樂學校に入學し、寄宿する身ごなりました。其際母が申しますには、貯金は出来ればたゞの一錢でもしておくがよいと申しました。云はれないまでも

貯金の有難さが深く頭にしみこんで居りますので、其の心を尙一段強くして、學の途につきました。

其頃十五六圓の金で、校費、舍費、又は臨時の書籍等求めますには、決して豊かな方ではございませんでした。私は其頃

貯金箱を備へて

居りまして、送金して参りますと、きつと一圓は貯金箱へ入れて、後で學用品、日用品の豫算を立て、見ますと、豫備費には二圓か二圓五十錢位の金しか残りません。此の豫備費を申しますのは、洗濯賃とか裁縫賃とかで、皆さんが準備して居りましたものです。それも自分の手で出来る限りは致しませぬ、何しろ學科におはれてばかり居りますので、人手に頼んで居りました。そこで私は親族から道具を借りて参りまして、絹もの洗濯まで致しま

した。實際出来ない事はありません。家政科に居りましたから、實地應用は此時に思ひまして、一人で日曜日の午後から致して居りました。其頃絹物一枚の洗濯代が、三十錢から四十錢位でしたので、それに相當する金は貯金箱に入れたのです。これは豫備費の中から取つたのです。又或時は古い封筒の内だけぬき取つて、外は半紙で作るかへてみました。それも一帖三錢ですから三錢だけ貯金箱に入れ、又或日は神田あたりまで外出して歸りは徒歩で歸ります。用事もなく、門限の時間までに歸舎すればよいのですから、二三の方でこんな致して

片道の電車代は貯金箱の内

におさめました。又は何々教科書が何日より入るこの豫告がございます。日曜目を待ちまして神田の古本屋探しをいたします。そして新本の半額若く

は三分の一の代價で買つて歸り、きれいに表紙なご修理して使用致します。そして半額の金は又すぐ貯金箱の中に入れておきます。皆さんの中には新しい本を買ひなすつて、修了後は半額でお賣りなさる方も多くございますが、其の方のお心がわからんと思ひます。私はけつして教科書を賣つた事なごはございません。また或る祭日なごには舍生全體の活動寫眞見物がございましたが、私は何時も炊事當番中なごで行く事がございませんでしたので、見物料、電車代が右の箱におさまるのでした。けれども私は儉約はいたしまして、皆様から各な人だと思はれるやうな事は非常に心苦しいのでございます。あの櫻島爆發の時でした。皆さんが各自一圓の寄附をなさいましたが、私は四圓だけビスケットを買つて送らうと校長に話したら、喜んで下さいましたが、一方では驚いていらつしやいました。さうしてあなたはそんなに澤

山出す事が出来ますか、不思議に思はれてお尋ねになりました。そこで今迄の事をお話しましたら、大變お喜び下さいます、修身の時間に、皆さんに話してくれぬのお言葉で、實行いたして來ました事ごも話しました。

こんな風で修業年限一ケ年も終りました。さていよく卒業にあたりまして、諸先生に何なりとも記念品の贈呈云ふ事を考へ始めましたが、皆さんはお國へ電報爲替なごでお金の請求をなさいます。其時私は貯金箱をくだいて出して見ました。そして意外の金高に自分ながら驚きました。親族で頂いた三四圓も混つてゐますが合計三十一圓餘りございました。それで

諸先生への記念品

は申すに及ばず、送別會費も旅費も故郷の方々への手土産も、難なく作れました。國から旅費として十五圓送つて參りましたが、少しも手も附けない

で持つて歸りました。歸宅後いろいろ話して見ましたら、両親も我子ながら感心した喜んで下さいました。實に此の動機こそ私に大切な貯金思想を與へて呉れましたと共に、これが習慣性となつたのでございます。

私は九州の某高等女學校に奉職する身になりました。此時私は十九歳で、女學生と餘り變りません位でございました。(これは女學校の四年級に編入試験を受けて入學した爲です。)女學校には寄宿生が百三十名ございましたが、此の子供上りの私に舍監と云ふ大責任を負はせられました。實際一と飛びで高女の職員となり、また舍監までには、私に過ぎた事でございますから、校長に尋ねました處が、東京に在學中の貯金をした事なき、色々お聞になつて居られましたさうで、此人なら舍生の世話が出来るところのこゝでした。

舍生百三十名の人に月末親許から送つて参ります金は、先づ合計千五百圓位でございました。各自に來月の學用品費、日用品費、校費、舍費の豫算を立てさせて、檢閲致しました上々國元に報告致させました。十圓の人もあり、十五圓の人もありまして、まち／＼でございます。この中私の取立てます金は四圓五十錢の食費でございますから、百三十名に對して合計五百八十圓となります。そして一日の食費が一人に付十五錢、百三十名に對し十九圓五十錢で、此中から

一人一日の食費から一錢づつ、儉約

いたしますと、一日一圓三十錢でございます。それで一ヶ月には三十九圓ほゞ貯金が出来ます。夏休み四十日間、冬休み十四日、試験休み七日間を除きますと、一年間の食事日数が十ヶ月でございます。その貯金高が三

百九十圓の大金になります。四年の後、卒業の時には千五百六十圓になります。これは共同貯金にして居ります。

生徒にこれを分割して見ますと、一人十二圓になります。この十二圓こそ生徒が少しも知らないお金なので、其の喜びは一通りでございませぬ。此の計算は百三十名に對してのでございますが、新入生と卒業生とで人数には多少の差も出来まじし、大の月も小の月もございませぬが、先づ右の様な平均になるのでございます。これでもまだ月に一度位は土曜の夜に害のない活動寫眞見物に出掛けませぬ。この費用は前記の外に一人一日に對して、都合により一錢の日もあれば、五厘の日もあり、一厘の日もございませぬが、それだけ節約した金を貯へて見物料に致します。それで随分意外の御馳走もいたゞかれます。一週間の献立には、二度の間食もございませぬし、土曜なごはお汁粉も

か、ライスカレーもかいたします。先づこんなやうにしまして、在職三年餘りで好成绩をあけました。

大正六年に私は今の家に嫁ぐ事になりました。高いくも申しまして、まだまだ諸物價は安い時でございました。私等は九州で生活する身になります。主人が炭坑の方に勤めるやうになりましたからです。當時三十圓の月給でしたが

先づ豫算を立て、

決算表を作り、之に依つて萬事を行ひました。米代、副食物代（調味材料も含む）、日用品、交際費、間食費、喫煙費、被服費、家賃電燈料、新道具費、薪炭費、新聞雜誌代、豫備費を取りますと平均二十六圓は要ります。此の外主人は社で積立貯金を一圓いたしますから、残高は三圓でございます。私は何

事も妻の心がけ一つと思ひまして、髪も自分で結つて居ました。若し人に結つてもらふに致しますと、月に五度行かなければなりません。これを當時一回十五錢にいたしましたして、合計七十五錢は豫備費の内より取りのけて、貯金致し、献立なども全部肉類、魚類、野菜類など滋養成分の比較表に依つて致して居りますから、滋養分に富んだ食品でも安く頂けます。かうして意外の金を貯金する事が出来ます。こんな風で三圓位は私が作る事が出来ます。そしてけつして自由を缺くやうな事はございませんでした。こんな都合で月に四圓平均は貯金が出来ました。其頃から妊娠しましたので、生れてからはとても今のやうでは養育は出来ないと思つて案じて居りましたが、折よく當時月賦販賣を致します呉服屋が出来ましたから、家主から頼んで戴いて、その

裁縫を一手に引受ける

事にしました。五ヶ月の身重をものこもせず、暮れも元日もなく一心に働いて居りました。着物は絹物ばかりの上に、縫賃も割がよくて、一ヶ月平均十二圓位の仕事を致しました。こんな金を取りましたのは四ヶ月間位で、其後はさうしても身體が苦しくて出来ませんので、一時やめてしまひました。出産のときには、炭坑だけに皆さんから祝物をはげしく持つて來られますので、返禮にはお客様を致して招きました。こんな事のために局から引出して遣つてしまひました。萬一貯金のない時は親にお願ひ致さなければなりません所でございます。

私等はいよくの時でないに親にお願ひせん事に決めて居りますから、尙や貯金の必要がございます。其後は子守りをする位で、人様の仕事は少しも

出来ませんから、たゞ節儉の方法なき考へて居りました。丁度物價が高くなり出しましたので、主人の夏服、ワイシャツ、カラ、カフスに至る迄自分で洗濯致しましては、其都度貯金箱に相當する金を入れます。又顔剃りなきも床屋に行かず、自分で致します。芝居見物は餘り行かず、三度に一度のおつき合位にござめて、其見物料なきも貯金いたします。そして私等はヴァ井オリンなきの合奏をして楽しんで居ります。又他の奥さんは衣服等身分以上の品を求めの方が多いのですが、私は主人から四圓位の品を求めよ云はれました時でも

強い木綿物に代へて

半額位で事足りり致して居ります。そして半額は貯金致しますすけれども、主人と子供とは人様に笑はれるやうな物は決して用ひません。又炭坑は盆暮

の賞與が楽しみましたものでございます。千圓以下百圓位までなので、これこそ貯金の致し時でございます。處がこらない先から今度の賞與は、良人の服や、奥様の帯や、子供の着物とおきめなさる御家庭が少くございません。丁度大正八年十一月でございました。視學官がお見えになりました、ぜひ家庭の主婦に貯金思想をもつて貰ひ度い云ふお話しでございました。それに就て是非とも奥さん連中五六人一組となつて、シンガミシンを買つて、主人のシャツ、ズボン、子供の夏服からエプロンなき縫つて、買ふ價を比較して何程かの貯金をする様に、大正九年の一月より實行して貰ひたいこの事でした。然し、正月は二月となりまして誰一人も口にする方もございません。それで私は一人で又元の裁縫をする事に決めました。よしんば一日に一枚出来ないとも、子供の眠つたひまにする覺悟をきめました。だんく人様

に知られて、夜の目も眠れない程仕事がございますので、忙しい事つたらございませぬ。併し見習かたく子守が一人居りますので、よほご助かりました。絹布ばかり縫つておりましたので、毎月十八圓平均に上りました。これこそ月俸外の金なのでみな貯金いたしました。よく局長さん等が、裁縫成金ですわーと戯談ごも云つて居られました。ところが

とんだ不慮の災難

が起りました。八月十七日採炭休業日なので、主人と二三人の方に坑内巡視が當りました。その時炭車に轢かれて身體全部に數ヶ所の大負傷をして、人事不省となりまして、醫局に入院いたす身となりました。三ヶ月餘りの入院中に、貯金の三分の二は遣ひ果しました。まだ公傷だから少なくて濟んだのでございますが、此時も貯金がなかつたら、そんなに不自由だつたのでござ

いませうか。今更ながら貯金の有難さがしみじみわかりました。

其頃長女には毎月三圓宛貯金致して居りました。これは中等教育を受くる時の學費の幾分かなりと思つて、貯へる事に致しました。これが一年に三十六圓ですから、今より十三年、即ち女學校に入學致します迄には、四百六十八圓になります。此の金は勤務先の都合上、田舎に暮すやうな事になりました時には、寄宿舎に入れなければなりません。寄宿舎生活を致しますと、五百圓と見るのでございます。今時はこんな事ではござうしてもむづかしい事と思ひますが、何分かの足しにはならうと思ひます。

このやうに致しまして、三年間炭坑地で暮して居りましたが、大正九年五月から福岡縣築上郡八屋町の日本電氣鐵板株式會社の創立につきまして轉勤

いたしました。炭坑を辭職いたしました時、主人の積立金が百三四十圓ございました。これを受取りました時は、賞與か何か頂くやうな氣持だつたご主人が申して居りました。

盛なるべき此の會社も、工業界の打撃の爲に工場は事業中止になりましたので、四五人の重な方々だけが残されて、他の方は皆思ひくの方へ離れ離れにいらつしやいました。それで手當などはございません上に、今まで二百圓月給の方は百五十圓、百圓の方は七十圓云ふやうに、収入が減つて居りますやうな悲しい運命でございます。それで

毎月月給の内から五圓

はすぐ引取りまして、主人等の積立金を共同でして居りますので、其の方に入れて、その残りを月給に見做しまして、豫算を立て、暮して居ります。

月末に五圓はごういたしましたしませんが、始めに取り去つてしまつたでございます。そして一日の副食物費、即ちお料理の方に六十錢平均を當てて居ります。この内で滋養成分比較表に基いて献立いたします。世間で食物中無上の滋養物だご考へられて居ます肉類魚類でも、其成分を比較してみますと、豆類などは一頭地を抜いて居りますので、豆腐などは安價で滋養に富んで居ります。價格にいたしました所で一個五錢でございますが、鯛など百匁もございましたら、七八十錢いたします。そして脂肪分だつて動物性脂肪より植物性脂肪の方が遙かに優良でございます。かうして意外に安く上りますので、貯へも意外に出來ます。さうして一日に二十錢は子供の教育費に貯金いたして居ります。それは長女に十錢を、昨年十一月に生れました次女に十錢の割合でございます。私等はほんごに薄給でございますして、人様に申すも

恥しい次第でございますけれども、一度に貯金を十圓もいたす云ふ事は、
とても賞與を除くの外は出来ません。それに時が時で、勿論賞與はございま
せん。其上次女が昨年十二月より氣管支を悪くいたしましたして、今尚二通り
の服薬を續けて居りますので、實にひどい時でございますして、主人の貯金は
少しばかりづゝ引出すやうになりましたが、子供の學資金にあてた貯金は私
の色々の方面の節約の結果ですから、無いものと思つて、絶対に引出すやう
事はございません。

貯金は其人其人の心がけ

で出来るものでございまして、決して出来ない事はございません。まして
皆様の御家庭の内は豊かでございますから、驚くほご出来る事と思はれま
す。

此の筆をこりました事を、更に動機を致しまして、今よりは一層の研究を
して貯金する事を感じいたしました。以上は私が兒童時代より學生時代、教
職時代に現今の家庭に至るまでの實驗談で、たゞく貯金は出来ぬものでは
決してない云ふ事を、自分の實驗に照して書きましたもので、學生諸子、
並に父兄の方々に少しでも参考になりますれば、此の上もない幸と思ひま
す。

五、青年團の貯金（三等當選）

廣島縣安藝郡音戸町波多見

山崎徳市

私の村は吳軍港に近い關係上、職工と農業とが主なる所で、戸数は僅に百五六十戸位の極小さな部落であります。丁度今から十年程前に、時の青年會長は會の事業を興す爲、或時役場員諸君を集めて色々協議をせられた結果、一日四恩に報ゆること云ふ心掛けで、毎日四厘宛會員全部で毎月共同据置貯金を實行する事に一決しました。そこで役員が卒先して會員に勧めましたが、事情で直に實行出来ない人は漸次加入する事として、先づ其時の人数は二十五六名位でありました。其後次第に増加しまして約四十名位になつて居りま

した頃、青年團長（會を團と改稱）が變つて、其人が一層貯金の奨励に重きを置き、折角基礎が出来て居るを幸に、大に其の擴張に盡力せられまして、或時はお寺の説教の中休み等を利用して、貯金の必要及實行の容易な事などを説いて一般村民に勧め、又或時は貯金勧誘の歌を作つて各戸に配布しながら、種々勧誘に勉められた爲、小學校児童は勿論、戸主主婦嬰兒に至るまで加入するやうになりました、一足飛びに五倍以上の人数になりました。即ち大正五年十二月末の調では、總數二百十二名、貯金總額が一千四百五圓六十四錢一厘と云ふ割合になつて居りました。ところが其後歐洲大戰の影響を受けて、大阪、神戸方面の好景氣に乗じて、多數出稼する人があつた爲に、一時に十數名も減じましたが、又段々新加入者がありまして、昨年十二月末の調では、總數二百十四名に預金高總計五千八百二圓三十五錢二厘、假りに一人

平均二十七圓十一錢四厘云ふ割合になつて居ります。毎年十二月末日には現在高を計算して總計表を作り、貯金者其他各戸に配布され、又揭示板に記載せられるのであります。實に多數の力云ふものは偉且大なるものであるこゝ、見る人皆一様に感じられるのであります。

毎月二百餘名の約百二三十圓餘の預金は、四名宛の團員が交替に二十八日迄に集金し、四名の役員が責任を以て、一々帳簿に人名と金額を記入して、團長の許に持つて行きます。團長は間違のなき事を確めた上で、郵便局に送るのであります。凡て他人の事ですが、團の事業、又村の爲、延いては國の爲ですから、團員も役員も團長も自分の事は後廻しにしてまで、而も無報酬で、毎月滞りなしに長年の間未だ一言の不平も聞かず、圓滿に繼續せられてゐるのは、何よりの事だに愉快に感じると同時に、感謝せずには居られないのであ

ります。發起當時の役員であつた私にして、其時は餘り深い考へはありませんでしたが、今日に到りましては、眞に青年團の事業として確に成功の一つと信じます。

有産者、富豪者は別として、中流以下、殊に労働者中の心掛けある人々は子供が出来るに直に加入せしめて、相當苦勞をしても愛兒の爲なら、好きなお酒も三杯は二杯飲んで堪らへ、一日休むところは半日で、それを子供の爲に貯金をしてやると思ふに、苦しいところか却つて愉快に働ける話して居るのを聞いた事があります。かうして子供は大きくなる、貯金も殖える。相當成長後は或は教育補助費か、商賣資本か、女なれば嫁入道具費か、持參金か、それごとく子供を持つ親の考へのある事で、定めて楽しい事と思ひます。

次に大正五年に作つた歌を統計表を掲げます。

郵便貯金勧誘の歌

一ツトヤ 人よ此世に生れては、四ツの恩を忘る、なく
 二ツトヤ 不時の用意にふだんから、貯金すること忘る、なく
 三ツトヤ 皆々心を一にして、積みば塵さへ山となるく
 四ツトヤ 夜晝心に油断なく、締めよ貯金の袋をばく
 五ツトヤ いつも勤めて怠らず、そして餘して積みよかしく
 六ツトヤ 無理な工面をなさずとも、無駄な費用をせぬがよいく
 七ツトヤ 永く續けて撓まずば、人も羨む金となるく
 八ツトヤ 矢も立つからは岩だこて、人の意氣地の徹らずやく
 九ツトヤ 心盡せる貯金こそ、やがては身の爲め家のためく

十ヲトヤ 富める其身の光りこそ、やがては國の光りなれく

波多見据置貯金統計表

(一) 大正五年十二月末現在

名	稱	男女別	金額	人員	一人平均
波多見尋常小學校兒童	計	男	七五、七四五	二七	二、八〇五
		女	二八四、八五五	三三	八、六三二
		計	三六〇、六〇〇	六〇	六、一〇〇

名	稱	迫別	金額	人員	一人平均
波多見青年團	木船	先合	一四〇、七五〇	二〇	七、〇三八
		郷	一一五、〇八〇	一五	七、六七二
青年團の貯金			三五、六一一	八	四、三二六
					八九

青年團の貯金

九〇

名 稱	迫 別	金 額	人 員	一人平均	波多見區内戸主及其他					
					郷	先合	計	郷	先合	計
宮ノ浦		一二一、七二〇	一四	八、六九四						
計		四二二、一六一	五七	七、二三一						
郷		一五四、二四五	二六	五、九三三						
先合		二五一、九四五	四三	五、八五九						
計		一四四、八一五	一三	一一、一四〇						
木船		八一、八七五	一三	六、二九八						
宮ノ浦		六三二、八八〇	九五	六、六六二						
計		一、四〇五、六四一	二二二	六、六三〇						
總 計										

(二) 大正九年十月末現在

名 稱	迫 別	金 額	人 員	一人平均	青年團員									
					郷	木船	宮ノ浦	計	先合	郷	木船	宮ノ浦	計	
郷		三三〇、八五五	一〇	三三、〇八五										
木船		一九四、八二〇	一〇	一九、四八二										
宮ノ浦		三九九、九六〇	八	四九、九九五										
計		一、四五五、二一五	五〇	二九、一〇四										
先合		一、三五八、九九〇	五九	二三、〇三四										
郷		九二七、二八〇	三八	二四、四〇二										
木船		六九八、〇四二	三九	一七、八九八										
宮ノ浦		一、三六二、八二五	二八	四八、六七二										
計		四、三四七、一三七	一六四	二六、五〇七										
總 計		五、八〇二、三五二	二二四	二七、一一四										
前 年 度 分		四、二八二、四六七	一九二	二二、四〇九										
青年團の貯金														

九一

青年團の貯金

九二

前年度ニ對スル増加

一、五二九、八八五

二二

四、七〇五

金の生る木は辛抱畠に植えてつくれ。

六、貯金して女子高等師範卒業 (三等當選)

香川縣三豐郡大野原村一八六三

中井隆



中井隆子さん

嫁入仕度はいらぬから

明治卅四年の夏、岡山縣立高等女學校

本科二年の補缺募集がございました。

私は其時高等小學校の四年生(今の高等

二年に相當)でした。かねて中等教育を受けたい云ふ志望を持つて居りましたが、何分其頃はまだ高等小學をさへ女では卒業するものが少なくて、女學校へ入學する、しかも田舎からわざわざ、岡山まで勉強に出る云ふ事は、よ

貯金して女子高等師範卒業

九三

ほご突飛な事のやうに考へられて居ましたので、両親が許して呉れませぬ。色々頼んだ末『お嫁入の仕度は決して要りませぬ』と云ふ約束で許しを得ました。急の思ひ附きで、準備もろくく出来て居なかつたのでしたが、九月始めに十四里の道を車に揺られて、たゞ一人受験に出かけました。三十六人の中から九人さるのでございましたが、運よく五番で入學が出来ました。

學資を貰ふのが借金するつもりで

それからは儉約をして勉強しようと思ふことばかり考へました。私には姉が二人ございましたが、こちらも中等教育を受けては居りません。それを思ひますと、私一人が女學校に入れて貰ひました事は、たゞ時勢の推移であることは云ふもの、しみじみ忝く感じまして、父上から送つて下さる學資を一厘でも無駄に使つてはならぬ、貰ふのではない拜借して居るのだ、他日お

返しせねばならないと思ひました。學生としては必需品といつてもよい程の硯箱、それは十錢出せば買へるのですが、それも買はず、筆入もさうく買はずにしました。雑記帳は一度鉛筆で書きましたら、今度は其上へペンで英習字をして、いよく黒くなりましたら饅だめしに用ひます。此のやうに氣を附けて儉約しましても、寄宿舎生活でございますから、食費や舎費や月謝や割烹費を合して、七圓乃至八圓は要りました。其上休暇に歸省しますので、旅費が要りますから、一年に九十圓から百圓私の所謂借金をせねばならぬ譯になります。まあ二年の第二學期に入學したのでございますから、あつ二年と二學期父上のお世話になればすむわけでした。

望は次第に高くなる

四年になつた頃には望みは次第に高くなつて、より高い教育が受けたい

考へ出しました。そんな事を口に出しますと『まあ片輪者でもあるまいに』と親類の人達は申します。中等教育をさへ不必要だと思つた位の両親には、そんなに突飛な事だと思へられた事でせう。無論許して下さいさる筈はございません。私も私にしても此の上學資を出して下さいは申したくありません。それでも其の望みを思ひ止まること云ふ事は出来ませんでした。が『あのやうに上の學校へ行きたがるのだから、補習科にでも入れてやるがよい』と親類から取りなして呉れましたので、両親も許して呉れまして、三十七年三月卒業後も補習科に止まる事が出ました。私に取つてはこれも大きな喜びには違ひございませんでした。然し、上の學校へ行きたいこと云ふ考へを消すわけには参りません。友人の甲乙が入學しますと、高等教育の憧憬は一層強くなるばかりでした。何にかして苦學する方法は無からうか、先輩や知己に内々聞き

合せたり、方々の學校の規則書を取寄せたり致しました。其のやうにして居る中、運の悪い事には腸チブスにかかりまして、縣立病院に四十日も暮らさなければなりません。その爲に父上から百四十圓も出して頂きました。『これだけあれば一年半勉強が出来るのに』と思つて見ても致し方がございませぬ。今までの學資を合計して四百五十圓私は父上から負債したわけだと思ひました。

小學校の教師になつて

其年も明けまして、三十八年の一月、補習科をやめて郷里の小學校の代用教員を拜命致しました。月俸は八圓。これからが私の貯金時代であります。初め數ヶ月は月給を父上に残らず出して居ましたが、中途からお願ひして、食費は出させぬが、衣服、履物萬端、私の月給で支辨して、残りを貯金させ

て貰ふことに致しました。さうでなくても儉約はして居たのでございますが、それはくお話にならない程きりつめて居ました。女の十八云へば赤いものでも身に着きたい頃でございますが、私は兄さんや姉さんのお譲りの手織木綿の、綴りに綴つて二重になつたやうなものを着て行きます。幸筒袖といふきまりになつて居ましたので、襦袢の袖は要りませぬ。有り合せの小切でカフスのやうなものを造つて置けばよろしい。衿は白キヤラコを洗ひくしてかけます。下駄はさし齒で、時々齒かへをさせます。風呂敷も木綿、足袋は刺子にして仕方のなくなるまで穿きます。頭の髪にはワセリンを買つてつけますが、其他には髪や顔の爲には何一つ買ひませぬ。齒揚子は竹柄に限りません。學校から歸つて参りますと、經木眞田を編みます。讀書しながら編めますので、甚だ好都合で、通信費位はこれで支辨が出来ます。こんなに致します

と、月給は殆んど全部貯金出来ます。其中無試験檢定で、小學校本科正教員の免狀を頂きました。年々俸給が上りまして、四年目には十三圓貫つて居りました。十九歳の時、鼻の治療を受ける爲、六十日程縣立病院に通ひましたので、引出して遣ひましたけれど、それでも滿四年教員を致しました時には四百圓の貯金を有して居りました。

高等師範へ入學

明治四十二年、奈良女子高等師範學校が新設せられました。第一回の募集がございましたので、多年の宿望を達したいと心はおざり立ちましたが、一方老い行く兩親の心を察しますれば、多少ためらはぬわけにも参りませんでした。色々考へましたが、また他日孝行も出来るだらうと、遂に願書を出しました所が許可になりました。それから儉約した事は前と同じでございます

貯金して女子高等師範卒業

す。銘仙を平常着にして居る人達の中で、相變らず本裁始めに、母上に作つて貰つた手織木綿を晴着にさへ着て通しました。襦袢の袖は夏は白縮、冬はネル、それが古くなつたら胴に致します。萬事此の風で押し通して参りました所が、足りないかこ心配致して居りました貯金が剩つてまゐりました。殆ど實際には思はれない位でございますが、幸簿記帳に明瞭に残つて居りますから、左に掲げませう。

受 入

一金六百二十七圓五十一錢九厘

内 譯

金六圓四十一錢五厘

入學前囊中所持金

金百八十六圓三十錢四厘

給與金

金八十圓五十錢

歸省の際旅費並卒業の紋服費
として父上より惠與金

金三百五十四圓三十錢

貯金引出

支 出

一金六百十五圓四十六錢

内 譯

金九十一圓八十二錢五厘

書籍費

金四十五圓六錢

學用品

金二百九圓七十五錢五厘

食 費

金六十九圓七十七錢五厘

衣類費

金四圓九十三錢五厘

治療費

金十四圓五十三錢

通信費

貯金して女子高等師範卒業

貯金して女子高等師範卒業

一〇二

金十五圓三十四錢五厘

會費

金七十三圓三十四錢四厘

旅費

金九十圓八十九錢一厘

雜費

差引金十二圓五錢九厘

囊中所持金

卒業後

大正三年に卒業致しました。卒業の喜びはおそらく人一倍だつたと思はれます。自分で自分を^{フリンギングアップ}まで鞭達向上せしめた云ふことは小さいながら、一つの成功だ。心窃かに微笑まぬわけには参りませんでした。両親も非常に喜んでくれました。これも全く両親のお蔭です。併し、私は常に其の意に背きこそすれ、何等孝行らしい孝行も致して居りません。それも負債を脊負つて居るに同じ事でございます。前り四百五十圓の負債もあり、孝行の負債もあるわけでございます。

私は一部支給を受けて居ましたから、國庫からも負債して居るわけでございます。勤儉の手は決して弛められません。大正八年七月までなるべく郷里近い所で奉職致しました。其間にほつ／＼嫁入仕度を整へまして目下の所に嫁入つたのでございますが、なほ千圓許り貯蓄して居ります。これは四百五十圓の利息であると思ひ、自分には手を附けずに居ます。なほ嫁入りするにき、入費の足しにせよとて父上から下さいましたお金、これは貰つてはならぬ金でございますが、折角親の慈悲でございますから頂きました、これも手をつけてはならないお金として貯へて居ります。

婚期を晚らす云ふ事まで真似ていたゞいてはなりませんけれども、質素に甘んじて華美の風に流れない事、借錢して居るつもりで、心の緊張を弛めぬ事、一寸入用でないお金は懐に持つて居ない事、このやうなことは今時の

貯金して女子高等師範卒業

一〇三

若い女の方に真似ていたゞいてもよろしいと存じます。誠につまらないお話をし致しましてお恥しいことですが、自分で人知れぬ愉快を感じて居ますので、つい思ひ附いて筆を採りました。

七、工女の貯金 (三等當選)

福島縣安積郡郡山町久保田

伊藤 秀子



伊藤秀子さん

貧乏はしてもお家柄だゞ世間から云はれて、澤山もない田地なのにあまり働きもしないで、祖父は死んでしまひました。幸理解のある父は、私を小學校卒業後補

習科へ入れて呉れました。其後暫くは靜な平和が續いて居りましたが、不幸は何時見舞ふかも知れぬ。遂に平和な我家に不幸は訪れて來た。それは父の病氣である。一年以上も病の床に就て、母はこれが看護に働きも出來ず、こ

う／＼私ともうすぐ卒業するこいふ大正六年の櫻咲く四月、父は長の看護のかひも無く、空しく果て、しまひました。其頃はもう財産はおろか、少しは借財も出来た。もうお家柄、お家柄を贅澤を口にする時期では決してなかつた。昔造りの大きな家屋、代々傳はつた家具類一切を賣拂つて、母の里方に近い郡山の町はづれに、小さな家を借りて日を送ることにした。兎角健康でない母だつたから、學校へ行く事は思ひもよらぬ事で、残念ながら十七の春、卒業の嬉しい日を目の前にひかへて、中途退學しました。學校を止めた私はたゞ家に居るわけにはまゐりません。外に良い就職口もありませんので、幸東京のモスリン會社（龜戸の東洋モス）に行つて、働いて居る友達がありまゝすので、それを頼つて、上京することに決心しました。母一人一人が別れて行くのです。一夜は二人で泣き明かしました。私は心に堅い／＼決心を致

しました。

きつと澤山のお金を溜めて

元のやうな大きな家へ歸つて母を慰めて上げよう。死んだ父上を喜ばせよう、これが私の貯金の動機であります。そしてモスリン會社の女工となりました最初の中は、今迄の學校生活に會社の寄宿生活にあまりの隔りがありますので、泣いた事も幾度あつたか知れませんが。其の都度『家を興さう、昔のやうなあの大きな家』と心に勵みの鞭を打つて、懸命に働きました。丁度其頃歐洲の戦争で會社も好景氣でしたので、日給の外に戦時手當だの、臨時特別手當だのこ可成りの収入がありました。豫て貯金の秘訣は、入るを量つて出づるを制するに云ふことであることよく記憶して居りますので、入社の際月から豫算を立てました。

工女の貯金

一〇八

入の方

日給六十錢 十 圓

二割手當

三圓六十錢

特別手當 二 圓

皆勤賞(日給三分)一圓八十錢

計 二十五圓四十錢

出の方

食費(一日九錢) 二圓七十錢

新聞雜誌

一圓四十錢

化粧類(油、紙) 一圓五十錢

小遣

三 圓

會社貯金 一圓八十錢

郵便貯金

十五 圓

計 二十五圓四十錢

右のやうにきめまして毎月きち／＼實行いたしました。若い自分の目には人の美しい着物、美しい飾りはよく見えます。木石ならぬ身には欲しくない

わけはありません。それらが羨しくて、幾度故郷を出る時の堅い／＼決心も覆へされるやうな危険があつた事でせう。まだうら若い十七の小娘ですもの。其度に思ひ直して今にきつ／＼人なみに、否それ以上に／＼、ぢつ／＼目を閉ぢて忍耐して居りました。そして

毎月間違はずに豫算通り

の貯金を致して居りました。一日休む／＼、一日分の日給／＼皆勤賞／＼に大した相違がありませんから、身體を大事に十分衛生に注意しました。寄宿長からは月々二度裁縫室へ集まつて、いろ／＼な世渡りの道等を説き聞かされます。『貯金する人は直接に自分の爲で、又間接には國家を益する忠義な臣民である』等の教訓もありますので、私の以前の決心は益々堅くなるばかりでした。月々／＼溜まつて行くのを國許の母へ知らせて喜ばして居りますつもりな

工女の貯金

一〇九

のに、母からは一年ばかりたちましたら『お前を會社の女工等にさして置くは死んだ父様にすまない。第一此の母の心にすまないから歸つて来ておくれ』右のやうな手紙が幾本もなく届くのです。あ、情ない母だ。なぜ私が女工になつて父様にすまないだらう。なまじ母の手許に居つて、仕事もなく、人様の世話になつて居たら、それこそ父様にも濟まないかも知れぬが、勞働は神聖なもの、理解のない母の心が恨めしく、又子を思ふ親の心がありがたくて、感泣の涙にくるゝ事も屢々でございました。其度に早くお金をためて、一日も早く故郷を出る時の意思の達するやうに、一層働きました。稼ぐに追ひ付く貧乏なしとかや、年に三度の昇給も度重つて、三年の後は四十五圓餘の収入があるやうになりました。多くの者は昇給する度に、昇給しないと思つて、やれ着物、やれ淺草遊び、遣つてしまひますが、私はとてもそ

んな考へにはなれません。昇給の度に前の豫算の貯金の部を増すのみで、支出の方は幾年たつても元の通りでした。友達の中には女は着物が命だもの、一度に澤山買ふ事が出来ぬから、一枚二枚も現在不用の品を新調して、行李や、箆笥の底にしまつて置く人がありますので、私も一寸考へまして成程、其の氣になりましたが、よく考へるに現在不用の品、其の代價を貯金すれば利息が幾らでも附く事を悟りまして、全部貯金致しました。

國を立つてから早くも三年立ちました。其中に溜めたお金が七百圓程です。利子も餘程附きました。貯金の通帳を出して見る度に、此の

細い腕でこれだけのお金

がたまつたかと思ふに、嬉しくてなりません。其後母から度々歸國を促されますので、大正八年寄宿舎を別れて田舎へ歸つて參りました。

母は常々商業を望んで居りますので、何か良い適當なものを撰んで居りますが、何分にも資金が不足で思ふやうに行きません。せめて千五六百圓になりましたならば、私は又土地の郵便局へ事務員として職を求め事になりました。安全で、また割の良い國債を五百圓求めて、未來の資金に致して居ります。そして毎月の収入から定めた貯金をいたす事を今でも怠りません。貯金と同じですが、年老いてからの東京見物費に、郵便局の保険へも入れて頂きました。あまり貧弱な私の経験ですが、ありのまゝを書きました。私と思ひますには、貯金すれば出来るもので、美しいもの、欲しいものに打ちかつ強い忍耐力が第一に存じます。

八、小學教師の貯金 (三等當選)

名古屋市白川町一丁目九番地

廣瀬綱太郎



中島重太郎氏

『名に富の光は汗の貯金かな』野田遞相の揮毫せられた俳句の一軸を戴いた愛知縣愛知郡愛知第二尋常小學校は、學童貯金について確に實績を挙げた。此の成

功は同校訓導貯金係中島重太郎氏が十餘年間熱心な奨励の結果である。ここには言ふまでもないが、中島氏自身が克く刻苦零細の金を積む力行者である。ここが力強い響きを與へたからである。話は十九年前から始まる。

中島君は高等小學校を卒業して家事の手傳ひをして居たが、ある事情で大阪の下駄問屋へ奉公に行つた。もごく君の家は相當に資産があつたが、重なる不幸の爲に生活のざん底に投げ入れられた。それで君は奉公に出なくてはならなくなつた。處が禍は後から後から踵をついで來た。君の奉公先の主人は一攫千金を夢みて、相場に手を出したが、まんまご失敗して、首も廻らぬ始末になつたので、仕方なしに君は主家を引き下かつて名古屋へ歸つた。それは奉公に出て僅か一ヶ年後の事である。

實家が不幸な目に出逢つて、蓄へが無かつた爲、一家を擧げて路頭に迷つたここをまざぐみ見せ付けられ、今又主家が離散の跡を見て

しみぐ貯金の必要を痛感し

且山師的投機的のこころは一切やるものでないこ痛切に胸に刻み込んだ。そ

して自分は生涯堅い正しい職業に就いて、自己の力に依つて少し宛でもよいから貯金して、健實な充實した生活を續けようこ覺悟した。

そこで教員にならうこして検定試験を受け、明治三十七年十月幸に准教員の資格を得、翌年四月縣下西春日井郡下小田井尋常小學校に就職した。丁度校長木下健氏は貯金奨励を熱心に努め、其の必要を主張力説する人であつた。君が日頃志して居た貯金實行に取りかゝる絶好の機會が來たのである。木下氏は君が就任第一回の俸給日に、君を呼んで「知つての通り學童貯金を奨励するには、教員自身が實行せねばならぬ。それで本校職員は内規に依つて月々貯金して居る。他の職員も一圓づゝやつて居るが、君も俸給の内で一圓だけ貯金してはさうか」こ。君に何の不服があらう。其日校長は君の貯金を預入して、郵便貯金通帳を渡された。明治三十八年四月二十一日は、君が貯

金繼續實行者としての第一日であつたのである。俸給の中から、それも僅か六圓の俸給で、一圓の天引きは随分つらかつたが、君は敢て貫行した。併し君は一家の活計を補助し、その傍正教員の資格を得るために参考書を求めたり、私塾へ通ふために少なからぬ費用が要つた。木下校長はよくこれを了解して居て『君が修養の爲又一家維持の爲にあらば、貯金の拂戻も止む得ない』と言つて居た。

君は此の學校に三ヶ年奉職して、明治四十一年四月現在の學校に轉じたが、其時通帳に残つて居た金額は一圓四十錢に、別に五圓貯蓄債券一枚であつた。別れに臨んで木下校長は『君は

貯金を貫き得る人だ

早く資格を得て益貯金に努めて呉れ給へ。三ヶ年間の君の貯金の累計はも

こより少ないがそれも故あつての事だ。有益に遣つたからだ。精神的に言へば積んであるも同じことだ。奮發して呉れ給へ』。君は『先生から受けた感化と貯金に對する肝銘は口では申されませぬ。唯々將來貫行して先生に報います』と堅い決心を見せた。

現在の學校に轉任して間もないこと、父が病氣にかゝつて床に就いた。今までは何かと働いて自活をして居た父が病んでは、一家の經濟に大變動を來した。さうしても君の俸給と母の賃仕事で生活を立てゝ行かねばならなくなつた。そこで君は學校に勤めて私塾に通ふ傍、内職をして天引貯金を續行した。けれども一家の活計を維持し、その上自己の修養に要する費用を産み出して行くことは餘程困難であつて、時々さうしても幾分拂戻しをせねばならなかつた。併し年を追ふて貯金の額が増して行つて、その金が如何に有効に

利用されたかは次の表を見ても明かである。みな君が零細を積んで他日に備へんとする勤儉力行の結晶であり賜である。

年次	預入高	拂戻金高 (使途)	預補充高	利子	利證券子	差引 現存高	備考	俸給
明治四十一年	一三、七五〇	一三、〇〇〇				一、四〇〇		九、〇〇〇
四十二年	一三、三〇〇	生活費不足ノタメ 八、〇〇〇		〇、九〇	一、五〇	三、三九〇	天引月一円ト 小遣節約預入	一〇、〇〇〇
四十三年	一三、六〇〇	同上		二、〇〇	一、五〇	八、〇〇〇		一一、〇〇〇
四十四年	一六、一五〇			一、二〇〇	一、五〇	三、三三〇		一三、〇〇〇
元大正二年	三、一五〇			一、九〇〇	一、五〇	四、〇〇〇		一四、〇〇〇
三年	一六、一五〇	學費ト建具買入 二、六〇〇	二五、四三〇	二、四五〇	三、〇〇	七六、七八〇		一六、〇〇〇
四年	二二、四〇〇	自身與ノ手術ノ爲 五、〇〇〇	二、六三五	一、六七〇	三、〇〇	三九、七八五	同	一八、〇〇〇

年次	預入高	拂戻金高 (使途)	預補充高	利子	利證券子	差引 現存高	備考	俸給
五年	一四、四〇〇	講習會月謝 九、五〇〇	二七、三〇〇	二、三二〇	二、八〇	七四、五七五		一八、〇〇〇
六年	一三、四〇〇	父母京祢本願寺詣 一五、〇〇〇	一三、六五〇	三、五六〇	二、八〇	八九、四六五		二〇、〇〇〇
七年	二二、七四五		一七、九九五	五、二八〇	七、六〇	一三五、二四五		二三、〇〇〇
八年	六、七五〇	綱雄君治療費取替 一〇〇、〇〇〇	一一、四九〇	七、四九〇	一、三三〇	二九、〇一五	天引月五円小 遺節約	二八、〇〇〇
九年	一〇、〇〇〇	信雄君旅費取替 一〇〇、〇〇〇	二〇、六〇〇	未記入	未記入	三三九、六一五	天引月十円小 遺節約	六〇、〇〇〇
二十年迄	二〇、〇〇〇					三五九、六一五	同	六〇、〇〇〇

三百五十九圓六十一錢五厘の金は、決して多額の金子とは言へぬが、これには

君の血と汗と魂が

こもつて居る。尙別に生活費調節通帳を拵へて別途収入を預け入れ、これで五十圓證券、二十五圓證券、債券各二枚づゝを求め、まだ残高が六十五圓四

十錢五厘ある。此の外結婚の當月より妻の名で月一圓、大正九年一月愛兒をまうけたが、是又月一圓づゝを貯金して居る。これ等を合したら優に六百圓を超へるのである。

明治四十二年から數年の間は君が最も苦闘を續けた時で、一面にあゝした貯金額を残しながら、圖畫の専科正教員、及び尋常小學校本科正教員の資格を贏ち得、次いで少なからぬ月謝を参考書の費用に追はれつゝ、小學校本科正教員養成講習會へも出席して全科を修了した。かうして君は資格と實力とを具へた教員として立つことを得るに至つて、愈學童貯金奨励に全力を注いで、着々其の成果を収め実績順に擧がるに及んで、大正七年三月時の遞信大臣田健治郎閣下から貯金奨励功績顯著の廉を以て旌表の光榮を擔つた。

表彰された年の九月妻を迎へた。縁談が持ちあがつた時先方の親が『何は

無くとも、あの貯金で名高い中島さんへなら娘を嫁らう』と言つて纏つたさうだ。

職務に精勵の功空しからず、進級につぐに増給の發表、勢ひ貯金はすんずん殖えて行つた。歐洲戰亂の影響を受けて

物價暴騰の際に當つても

依然として貯金を繼續し得たのは、大正六年以來、別に生活費調節通帳を作つて、臨時手當、二部擔當手當、年末賞與、或は年功加俸等別途收入の幾分を割いて、預け入れて置いたお蔭であるこの事だ。

大正六年三月貯金の一部を引き出して、老父母を京都本願寺、伏見桃山御陵に詣でさせ、年來の宿望を叶へた。大正八年九月末弟綱雄君が奉公先から數入りに來て、急病に罹つて入院せねばならなかつた時にも、百圓を融通し

て早速手當をさせ得たのは、皆君が蓄への力に依つたのである。又翌年九月支那上海の木村洋行在勤の次弟信雄君が商用を帯びて内地に歸り、用務を果して歸支するに際して、都合により旅費二百圓を取換へて期日までに信雄君をして主命を果たさした『あの時若し僕が貯金がなかつたら、弟は海外で辛慘十ヶ年築き上げた信用を失ふたのであつたかも知れなかつた』こは君が述懐である。學校でも君の首唱で、職員一同が規約貯金の外に、大正五年一月以來旅行貯金にて見聞を廣める事を目的とした旅行費を月五十錢宛蓄へて置いて、昨年三月打ち揃ふて史蹟を探りに大和巡りに出掛けたが、得る處が非常に大きかつたこのことで、皆が『これは全く君のお蔭だ』こ心から喜んだといふことである。

かうして君の貯蓄の精神は一家の基礎を固め、學童にその習慣性を培ひ、團體に社會に少なからず貢献してゐる。

君は今でも破れ洋服に、十年も前につくつたマントを着て居る。そこに君の生命があり輝があるのだ。

九、青年自覺奉公貯金 (秀逸)

滋賀縣坂田郡息長

北野源治



北野源治氏

奉公の美德を常に忘れぬやうにする工夫はあるまいか、我が青年會員一同熟議の結果、遂に次の通りに定めた。

一、毎月一回の奉公日を定めること。

二、奉公貯金をすること。

一月に一日位は終日公の爲に奉公するといふのは國民の義務である。年中を平均して見るに、徒に遊び暮す日は、月に二日や三日でないのであるから、

多忙な人でも、月に一日位の融通の日がないことにはない筈である。

其の奉公日を何日にするか。明治大帝が深き大御心から勤儉の御詔書を下賜せられた、十三日を以て奉公日と決めたのは、大に意義のあることである。

會員一同其日は是非とも其の趣旨を忘れないと同時に、よく勉勵して、其日一日の仕事の出來高を奉公貯金として預けること云ふ約束で生れたのが、我が青年會の十三日會である。尤も其の日は月により一堂に會する事もあり、三々五々會して働く事もあり。又一齊に出動して、請負事業の勤務に服する場合もある。場所の如何に係らず、同一趣旨の許に働いて、同一法によつて貯金するのである。かうして年を重ねるに随つて、巨額の基本金が出来る。これは本會の發展に資する所以であり、國家奉仕の精神涵養ともなるのである。三年前から實行して來た作業の概況は左の通りである。

青年自覺奉公貯金

一二六
賣上手間賃

一月十三日	藁仕事(繩、草履、草鞋、蓆織等)	、五〇〇
二月同	同	、五〇〇
三月同	道普請、請負事業	一、〇〇〇
四月同	田打請負	一、〇〇〇
五月同	植付耕作	、五〇〇
六月同	植付耕作	、五〇〇
七月同	養蠶手傳	一、〇〇〇
八月同	養蠶及除草	一、〇〇〇
九月同	草刈	一、〇〇〇
十月同	秋の獲入手傳	一、〇〇〇

十一月同	同	一、〇〇〇
十二月同	山の薪出	一、〇〇〇
計		一〇、〇〇〇

本支會員が三十人あるから、一ケ年末に一人貯金額十圓として三百圓、三年後の今日で約千圓の貯金額となった。其趣旨を本村全支會員にも宣傳して實行する運びとなったが、其の結果は全員百五十人として一ケ年の貯金額千五百圓、十ケ年繼續して郵便貯金とするに二萬五千圓の巨額となる計算である。

日本國民中の青年會員全部が實行することを一ケ年に會員(十五歳より廿五歳迄)約二千萬人にして二億圓餘の巨額となる。

かうすれば各青年會は其の利子を以て、何れも各種の事業を維持發展する

ここが出来、將來奉公の道にかなふのである。かうしてこそ貯金の必要を覺えるのである。

一〇、海軍軍人の貯金 (秀逸)

舞鶴海軍工廠

水田米太郎



水田米太郎氏

今から十七年前、丁度日露戦争の半に山陰の一隅、海には十數里も距だつた山間僻地から、海軍軍籍に身を投じた志願兵の一人であります。海兵團に入ります

さ夫々受持の教員に就て軍隊の教育を受けることになりました。私の軍隊生活の二日目であります。教員から軍隊では衣食住も不自由はないから、所持金は全部教員が預つて置く。郷里の通信や、其他日用品等の必要があつた

海軍軍人の貯金

ら、其の都度支給するから、財布諸共教員室に持つて来い。全部貯金して置くこの命令でありました。私も前から郷里を出づる前役場から通知がありまして、旅費の外は持参してはならぬこの御達でありましたから、餘分の金は持つて居りません。其時囊中剩す所僅かに一圓五十錢でした。之が私の海軍出身郵便貯金の第一歩であります。私は教育でもありませんが、軍隊に入つたら勉強したい。次男で別に係累もありませんから、永く奉公したい云ふ決心でありました。併し無學でありますから、學科は到底他を凌駕することは不可能であります。

品行に於ては人後に落ちたくない

郷里に在る頃は酒や、煙草は幾分嗜みましたが、軍隊では新兵中酒や煙草も禁じられて居りますから、之等も此の機を利用して禁酒禁煙を深く心に

誓ひました。金錢を浪費しなかつたら、品性操行を慎む上に幾分助する所があると思ひまして、貯金を思ひ立ちました。

海軍では日用品を除く外一切官給でありますから、俸給の半額を貯金する方針を決めました。只今では新兵でも日給十七錢ですが、當時の新兵即ち五等水兵で、日給僅に五錢でした。月額一圓五十錢、其の半分を貯金して、残り七十五錢で通信料や、日用品購入の費途に充てました。此の新兵の五ヶ月間は外出さいつても、教員に引卒せられて、下士卒集會所へ一週一回の散歩外出がある位のものですから、勝手に消費することが出来ません。此の練習期間は半額貯金は容易でありました。一定期の教育を終つて、四等水兵に進級しますと、一躍日給十二錢になりました。其後十五錢から十八錢になり、二十一錢になり、新兵當時に比すれば、貯金も容易なやうであります。等

級の進むに従つて、海軍の事情に通じて来る。體が幾分自由になる。外出も度々出来ることになり、なおります。又海軍では入團してから一箇年経ちますと、六日目に一回、二年経つと四日に一度宛外泊があります。其他年二回、夏冬季には十日乃至十五日間の休暇があります。軍隊で兵員の一番楽しみは此の休暇であります。休暇毎に歸省して、父母の安否も訪ねたい。幸私の郷里は軍港に近距離でありますから、旅費等も比較的少額でありましたが、歸る毎には土産物の一つも買つて、父母や兄弟の喜ぶ顔も見たい。又軍隊生活に馴れるに従ひ、友人の交際もあり、勉強する爲には書籍も購入する。こんな次第で月によれば規定の貯金に不足を生ずる場合もありました。こんな時は其翌月から節約して補填すること云ふ風に、辛うじて目的を達することが出ました。丁度入團してから四年半で下士官に任用せられました。下士官の

初給が當時日給二十七錢で、其他の手當を加へても月俸十圓位であります。下士官になりますと、幾分交際も廣くなります。上陸外出も隔日であります。下宿も間借り位はする。家具の一つも買ひ入れる。日曜や祭日には下宿で食事をするやうな場合もあつて、規定の貯金に苦しむやうになりました。そこで種々熟考の末、四十二年の暮に妻帯しました。世帯を持つと、勢ひ費用も嵩みますが、獨身生活では軍人でも矢張り人間ですから心が散り、又思ふやうに勉強も出来ないから、妻帯して共稼したら、却て得策ではなからうかと考へたのであります。幸

妻も手内職で

幾分補助してくれましますの、其の翌年には俸給令が改正になりまして、稍増額を受くることになり、なつたのでした。二等下士官に進んで、月收十七八圓

なり、大正元年には一等下士官となり、二十圓から級俸の進むに従ひ、三十二三圓まで給せらるゝことになりました。此間私は比較的陸上の勤務が多かつたのですが、艦船に乗組んで、各地を巡航する場合もありました。新兵卒業から、一等下士官二級俸迄約十年間は、不要の金なご一厘も費すやうなことは出来ません。他人に吝嗇なご云はれたくはありませんから、相應の義理や交際も勤めねばなりません。幾度も挫折しかけた事もありましたが、幸似たもの夫婦で、互に助け合ひ、勵み合つて、始終勵行しました。其内准士官に進級しまして、多額の給料を受くるやうになるに共に、歐洲戦亂の影響で財界の變動が起つて、物價の暴騰に遭遇しましたが、子供が無いのこ、其間夫婦何れも未だ一度も醫藥に親しんだことのない爲に、續行することが出来ました。只今月俸百圓餘を戴いて居ります。同じ海軍に奉職して居る同級者中にも、金

高から申せば多額の蓄財を有する者もありますが、之等の中には戦役中戦地に在つて、戦時手當を頂いたり、論行功賞の恩典に浴したり、俸給以外の收入を得た幸福な者もありますが、私は永年奉公して居りますが、日露戦役も大正三年以降數年に渉る戦役中も、内地勤務でありまして、之等の恩典に薄く、又軍人でありますから、利殖の方法も致しません。今日迄如何に苦しき時がありましたも、國元から送金を受けたり、友人の補助を受けたともありません。只いたゞく俸給の半額を積むのみでありました。そして少しまこまりまごこ、郵便局から賣出しの債券を購入する。かうして積つた金が債券で〇〇圓、郵便貯金で〇〇圓餘りになりました。一時苦しい時は妻にも稼がして手助けをさせましたが、自力の續くやうになりましたからは、之も補助を受けません。

回顧すれば十七年の昔

國元を出る時着て来た着物は、海兵團の兵舎で小包にして郷里に送り返し、禪一つこは此の事でありませぬ。月俸一圓五十錢から百圓餘りなりました今日迄一貫するには、困難の場合もありましたが、一風變つた偏屈の私には、却て奮發心を増して、只今は氣樂な生活をして居ります。友人中には、子供も無いのに何の目的で貯金等するかと嘲笑した者もありましたが、私は子が無ければ、蓄財でもなくば誰れが末の面倒を見て呉れますか。子のある者が子の爲に貯金して、學費を作るのとは大差はありません。一層貯金の必要があるのであります。日本人は若い頃から既に養老の計畫をして、如何にも爺くさい元氣が無い西洋人は申すに云ふ説もありますが、老後の事を心配する爲に、元氣が消耗しない程度に自分の元氣を失はずに、養老の事を考へるのは、幾分進歩した思想ではありますまいか。寶の山を積むのを楽しみとするやうな考へ

に流れてはなりません、酒色に耽つたり、身の爲にならぬ喫煙をしたりする費用を節して、貯金するのは差支なからうと思ひます。

軍人は金儲の爲に奉公するものではありませんが、いたゞく手當の一部を節約して、郷里から送金を受くる代りに、親に少しでも送金したり、又は贈物等をして、親の喜ぶ手紙を見るのも愉快であります。私は今日迄新兵當時の心持で禁煙した結果か、身體強健、疾病の爲日も休業した事はありません。禁酒の結果、心の迷ひも起りません。後顧の患なく一意専心勤務に服して居ります。

十一、民力涵養貯金實行組合 (秀逸)

徳嶋縣三好郡晝間村

秋田喜友



秋田喜友氏

貯金の動機

私は郵便局長の家に生れて、漸く東西を辨へる時分から、毎日々スタンプの音や、貯金云ふ言葉を耳にして居るものです

から、貯金云ふ事には大變親しみを以て居りました。大正八年三月、内務省訓令第九四號を以て、民力涵養に關する五大要綱が發布せられましたので、私は大に感ずる所があつて、色々研究の結果、貯金組合を組織して、蓄財共

に精神的方面の修養に勉めよう。近隣を訪れて其旨を話しまし所が、非常に賛成を得て、同年十月十五日意志強固な同志十七名が相寄り、郷社天椅立神社に組合の成立を奉告して、嚴な發會式を挙げ、役員を撰舉して、民力涵養貯金實行組合の成立を見るに至つのでございます。

實行方法

實行の方法は誠に簡單なるもので、毎日各組合員金二十錢を出金し、組合員順番を以て集金して郵便局に預入れ、二十ヶ年間之を繼續實行せんとするのでございます。尙毎月一回修養會を開催し、精神修養の傍、組合員相互の親睦を計つて居ます。

集金用の赤袋と木札

之が集金用の袋は『赤心』云ふ意味で赤い袋に致してあります。そして

成立月日組合名の外に『貯金は誰れにも出来る御奉公』とか、色々の貯金標語を書いてあります。此の袋に一枚の木札を添へてあります。その表には組合員の順番、裏には組合の心得を左のやうに書いてございます。

一、毎日集金を忘るな

一、二日分を決して一度に集むるな

一、金は二十錢を繰合して出せ

一、誠心勤儉貯蓄の心は一時も忘るゝな

斯の方法で實行致しますから、子供でも十分用を辨じますし、又約二ヶ年の今日迄集金を怠つ事は唯の度もございませぬ。

近頃ではこの赤袋が通名になつて、集金に行く子供も『今日は赤袋でございます』と云ひ、組合員も『ハイ、赤袋ですか』と云ふ有様で、有益な赤袋

は毎日く組合員の家を訪れて、金三十錢を納めて、三圓四十錢を郵便局に吐き出して居るのでございます。

組 合 員

毎日二十錢で月金六圓と申しますと、定めし皆様は金持ばかりの團體であらうと思はれるでせうが、實際は全くさうではありません。飲食屋もあれば、女髪結もあると云ふ風で、ごちらかと申せば中流以下の者が多いのでございます。左に職業及財産の程度を申しますと

- | | | | | | | | |
|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|
| 官吏 | 一 | 呉服店 | 二 | 醫師 | 一 | 八百屋 | 一 |
| 料理屋 | 二 | 運送業 | 一 | 藥種商 | 一 | 雜貨店 | 二 |
| 飲食店 | 二 | 菓子店 | 一 | 女髪結 | 一 | 桐商 | 一 |
| 内 | 男 | 一四 | 女 | 三 | | | |

財産家 六 中産 三 無資産 八

右の表を見ましても、貯金は心の持ちやう次第で、誰れにも出来ること云ふ事がよくおわかりになる事存じます。

總會と國債の掛軸

本組合は毎年十一月十五日、即ち創立の日を記念として總會を開く事に致してあります。大正九年十一月十五日事務所としてゐる郵便局樓上に於て總會を開催致しました。丁度貯金高は一千二百餘圓になつて居りましたので、一千圓の國庫債券を求め、之を床に掛け、貯金通帳と重要書類を棚の置物とした會場の裝飾に、組合員一同の喜びは非常なもので、手料理の大根なますに舌づ、みを打ち、二十年後の成功を誓つて、閉會後一同打揃つて郷社に奉告を致しました。

眞の貯金は人を善道にみちびく

かうして一日二十錢の貯金は一ヶ年餘で千七百餘圓となり、組合員相互の親睦益々篤く、自然に共同一致の精神を生じて、貯金高の増加と共に組合員の品性は高くなり、忠實に業に服し、進んで國債に應じ、又救濟慈善事業、其他社會公益の爲には、組合の決議を以て相當の寄附をする事とし、現に貧民に金品を送りました事實もございます。

最後に御参考の爲組合規約及積立金表を掲載いたします。

組 合 規 約

第一條 本組合ハ勤儉ノ美風ヲ養成シ貯金ノ實行ヲ期スルト共ニ精神修養ヲ爲スヲ以テ目的トス

第二條 本組合ハ大正八年十一月十五日創立ス

第三條 本組合ハ民力涵養貯金實行組合ト稱ス

第四條 本組合事務所ヲ晝間郵便局内ニ置ク

第五條 本組合ニ左ノ役員ヲ置キ組合員中ヨリ互選ス

組合長一名 加印者一名 評議員一名

第六條 組合長ハ組合ヲ總理シ加印者及評議員ハ組合長ノ諮問ニ應ズ

第七條 役員ノ任期ハ滿四ケ年トス

但シ再選ヲ妨ケス

第八條 貯金ノ方法ハ毎日一人金二十錢ヲ出金シ組合員順番ヲ以テ之ヲ集金

シ郵便局ニ預入レ二十ケ年間之ヲ繼續實行スルモノトス

第九條 毎月一回修養會ヲ開キ修養ノ傍ラ組合員相互ノ親睦ヲ計ルコト

第十條 本組合員ハ脱退スルコトヲ得ズ

但シ轉居其他役員ニ於テ承諾シタルトキハ此ノ限りニアラズ

脱退ノ節ハ本人ノ預金高ヲ全部支拂フモノトス

第十一條 本組合貯金ハ五百圓以上ニナリタルトキ役員ノ決議ヲ以テ政府ノ所管スル債券ヲ購入スルコトヲ得

第十二條 本組合ノ貯金ハ組合員ノ要求ニ應ジ何時ニテモ縦覽スルコトヲ得

第十三條 組合同規約ノ加除訂正ハ組合總會ノ決議ニ依ル

第十四條 總會ハ毎年十一月十五日之ヲ行フ

但シ臨時總會ヲ開クコトアルベシ

附則

第十五條 本組合ノ貯金ハ創立ノ日ヨリ實行ス

組合積立金額表

(年四分八厘)

年次	金額
初年	一、二五〇、五二〇
五年目	六、八七九、九〇〇
十年目	一五、五七八、四六〇
十五年目	二六、五七五、〇八〇
二十年目	四〇、四七五、六四〇

喜びと悲み

○『七文から五萬圓』の小池九一氏は私立札幌報恩學園を經營すると共に、廳立札幌學院の方は囑託院長として今日に及びしが、大正十年三月三十一日付を以て道府縣立感化院奏任教授(高等官八等)に任ぜられ廳立札幌學院長に補せられ、一段の面目を施さるゝこととなりたり。

○『小學教師の貯金』の中島重太郎氏は、學童貯金の奨励に盡力され居りしが、俄かに病魔の侵すところとなり、大正十年十月二十七日遂に逝去せられたり。惜しむべし。謹んで茲に哀悼の意を表す。

民力涵養貯金實行組合近況

大正十年十一月十五日第二回總會開催に付、同組合より懇請の次第もあり、大阪遞信局員出張、其狀況を視察し、一場の講演を爲したり。

創立以來所期の目的の下に着々進行し、一般村民の模範となり、善良なる感化を與へ、現に其趣旨を賛する者續出し、總會前日十五名の組合員より成る『第二民力涵養貯金實行組合』の設立あり、第三組合の組織も亦近きにあらんとす。

總會は組合員、村内有志打揃ひ郷社に報告祭を執行したる上晝間郵便局樓上に於て開催したり。當日現在貯金額約三千圓、之を以て國庫債券等を購入のこととせり。尙當日大阪遞信局長より感謝状を交付したり。

大正十一年二月十日印刷
大正十一年二月十三日發行

貯金局

東京市京橋區鈴木町二番地

印刷者 石丸鶴吉

東京市京橋區鈴木町二番地

印刷所 東亞印刷株式會社

電話 京三三四、三三五

184

終

